

# 東アジア稲作農耕の起源と展開

飯 島 武 次

はじめに

- 1 中国の古代稲
  - 2 周辺地域への伝播
  - 3 収獲具から見た稲作農耕の伝播  
    稲作地帯に於ける収獲具の伝播  
    戦国・漢代の収獲具……日本への稲作農耕伝播経路の一つの可能性
- おわりに

はじめに

日本文化を形成している柱の一つに稲作農耕がある。最近の日米経済摩擦の中で米の自由化問題が大きく浮上してきた。日本人の主食である米は、食文化のみならず、農村の歴史的伝統・宗教・社会組織、自然環境・植生、水利権・治水などの、日本文化および自然景観と深く関わっている。稲作を基本とする日本文化の伝統と歴史の形成は、縄紋時代晩期前後の稲作農耕の伝播と同時に開始されたと推定される。日本の稲作農耕文化は、縄紋文化晩期以降、弥生時代を経てその後約2000年の歴史と伝統を持つ文化である。

しかしながら日本の稲作農耕文化は、本来的に日本に芽生えた物ではなく、東アジアの稲作農耕文化の伝播と呼ぶべき流れの中で形成された文化である。その意味に於いて、日本の稲作文化は外来の文化であるが、2000年に及ぶ歴史の中で、外来の稲作農耕が日本の風土と自然に根づき、日本文化の基盤を形成するにいたった。日本文化を形成する母体ともなった東アジア稲作農耕文化の起源の問題と、伝播の問題について私見を交えながらまとめてみたい。

稲作農業の起源に関しては、二つの学説が対立している。その一つは稲作農耕文化の起源を、雲南・インド＝アッサム地方に求める説で、その二は稲作農耕文化の起源を、長江下流域に求める説である。筆者は後説に賛成する

ものである。中国から日本への稲作農耕の伝播経路に関しては、中国考古学界で二つの学説が対立していると見ることが出来る。その一つは、中国社会科学院考古研究所・安志敏氏による学説で、華南（長江下流域）の稲作農耕文化が海路を経て直接朝鮮半島南部及び日本へ伝播したとする考えである<sup>(1)</sup>。その二は、北京大学考古系・嚴文明教授による学説で、長江下流域に起こった稲作農耕文化は陸路を北上し、朝鮮半島南部に伝播したのち日本に伝播したとする考えである<sup>(2)</sup>。中国から日本への稲作農耕の伝播に関して、筆者は後説に賛成するものである。

この原稿は筆者が、学生のために『中国新石器時代考古学概説』として準備し、出版の機会もなく机の中に暖めておいた原稿の一部を『駒澤大学文学部紀要』のために推敲しなおしたものである。従ってこの小文の前半の内容は、新しい見解を述べるのではなく、現在の稲作農耕文化研究の現状を私見を交えながら紹介するものである。後半に於て筆者の考えを述べてみたい。

## 1 中国の古代稲

中国に於ける稲作農耕の開始時期は、前5000年以前に遡ると推定されるが、東アジアに於ける稲作農耕の起源と展開について考える前に、まず、稲の植物的性格について簡単に紹介しておく。中国で古代より今日に至るまで栽培された稲、言い換えれば考古学の研究対象として出土してくる稲資料は、すべてアジア稲（*O. sativa*）と呼ばれる栽培稲である。アジア稲は通常、日本型とインド型に大別され、中間型としてジャワ型と呼ぶものを区別することもある。中国においては、日本型の稲を粳（粳）、インド型の稲を籼（籼）と呼んでいる。考古学の方面では、しばしば粳稲と籼稲の区分を問題にするが、日本の諸遺跡から出土する稲粒のほとんどが粳稲に属している。粳稲は草型が小さく、緑色が濃く、稲粒は短楕円形で芒が長く、低温に対する抵抗力が強く、炊いた時に粘りがある。籼稲は草型が大きく、緑色は淡く、稲粒は長楕円形で、芒は無いか短く、低温に対する抵抗力が弱く、炊いた時に粘りが無い。

今日、粳稲は日本、朝鮮、中国北部を中心に栽培され、籼稲は中国南部、東南アジア、インドなどで栽培されている。粳稲と籼稲の何れにも水稲と陸稲が存在している。水稲は水田に栽培され、陸稲は耐乾性に強く畑に栽培される。粳稲、籼稲の何れにも、また水稲、陸稲の何れにも、半透明のうるち（粳）米と、乳白色のもち（籼）米がある。

稲は品種数が極めて多く、全世界の稲の品種数は数万に及ぶと推定される。個々の品種には、それぞれの特性があるが、それらには早晚性（早稲，晩稲），多収性，耐冷性，耐病性，耐肥性，耐乾性などが認められる。また稲は感温性と同時に感光性を強く持った植物と言われている。

現在までに中国で発掘された稲作関係の最も古い資料は、すべて長江下流域で発見され、代表的な遺跡には浙江省余姚県の河姆渡遺跡あるいは浙江省桐郷県の羅家角遺跡などがある。それらの年代はC14年代測定によれば、概ね前5000年代から前4000年代の初めに測定されている<sup>(3)</sup>。河姆渡遺跡の第4層出土の木炭のC14年代測定の結果は前5005±130年（経樹輪校正）で、また、羅家角遺跡の第4層出土の炭化した芦葦のC14年代測定結果は前5090±125年とでている。これら長江下流域の稲作遺跡は、今日東アジアに於て発見されている稲資料出土の遺跡の中では最も古い年代を示している。

インドガンジス川流域に於てもC14年代測定において古い年代を示す遺跡から稲が出土している。インド共和国のウッタル＝プラデーシュ州アラハバード地区に存在するマハガラ（Mahagara）遺跡からは炭化米が出土している<sup>(4)</sup>。この遺跡に対するC14年代測定値は、前6570±210年あるいは前5440±210年，前4530±185年とでている。また、マハガラ遺跡のすぐ東の同じくアラハバード地区に存在するコルディーワ（Koldhiwa）遺跡においても稲の出土が報告されている。稲資料が出土した文化層の年代はC14年代測定によれば前5440±240年または前4540±185年であるという。マハガラ遺跡，コルディーワ遺跡のC14年代測定の結果を見ると、これらの遺跡から出土した稲資料が、河姆渡遺跡の稲よりも古い可能性を示すがごとく見える。しかし、東海大学の近藤英夫氏はマハガラ遺跡，コルディーワ遺跡出土の縄目紋土器，粗面土器，赤色磨研土器，黒色磨研土器に検討を加え、これらの土器が前2000年紀前半の文化に属することを明らかにした<sup>(5)</sup>。これらの稲は、インド最古ではあるが世界最古の稲とはなりえない。また、タイ北東部のコン・ケン州にあるノンノクタ（Non Nok Tha）遺跡において、C14年代測定で前3500年以前に遡る稲粃圧痕のある土器片が発見されているが、この年代も河姆渡遺跡の稲資料を遡る年代ではない。

このように中国周辺地域の古い稲資料と比較しても、河姆渡遺跡や羅家角遺跡の稲よりも古い資料は、今日のところ存在しないようである。

近年、東アジアの稲作農耕は、中国雲南省，インド＝アッサム地方にその起源があるとする説が、有力となってきている。京都大学東南アジア研究セ

ンター所長であった渡部忠世氏は『稲の道』(1977年)において稲作農耕の起源を雲南・アッサムに求める説を農学の立場から分かりやすく説明している<sup>(6)</sup>。また、渡部忠世氏は、1984年4月28日に上智大学にて行われたシンポジウムにおいて「アジアにおける古代稲作の諸問題——農学の立場から」と題して基調講演をされている。そのなかで、渡部氏は「雲南とアッサムを連ねる山岳・丘陵地帯をもって起源の中心と考えている」と述べられている。さらに「雲南とアッサムを連ねる山岳・丘陵地帯に起源した栽培稲は、やがてアジア各地に伝播を始める。この一次伝播の経路は主として大河川沿いにおこなわれたと思われる。……東方へは長江沿いに東支那海沿岸に達する経路が主流であった」とされている。渡部氏のこの説の一つの根拠は、野生稲が北緯25度以南にしか生息しえないとする考えと、稲が感光性の植物であると考えるところにある。国立民族博物館の佐々木高明氏は、『照葉樹林文化の道』(1982)、『続照葉樹林文化』(1976)の中で、文化人類学の立場からインド東北部から東南アジア北部、雲南にかけての地域を「東亜半月弧・照葉樹林文化センター」と捕らえ、その中からやがて稲作農耕が生み出されたと考え、雲南省から長江あるいはメコン川、イラワジ川などの諸河川沿いに稲作栽培が伝播していく経路を考えられている<sup>(7)</sup>。そして粳稲型の稲が日本に達するルートは長江沿いに東に伝播するルートであったと結論づけていられる。佐々木高明氏は、1985年2月3日に、赤坂公会堂で行われたシンポジウムにおいても、上述の主旨を述べられ、その内容は『日本人の起源』(小学館、1986)として発表されている。

筆者は、1985年のシンポジウムにコメンティーターとして参加し、佐々木高明氏の説に対しささかの批評を加えた。佐々木氏の照葉樹林文化センターから長江流域を経て日本に至る雑穀複合体の農耕伝播ルートは、又、氏の言う稲作農耕の伝播経路でもある。しかしながら中国考古学を研究している筆者の立場からは、佐々木氏あるいは渡部忠世氏の説には賛成しがたい。

今日、我々が知りうる考古資料を見る限りにおいては、雲南省内に中国最古の稲作農耕を見いだすことはできない。稲作農耕の存在を知りうる考古資料として最も的確な物証は、炭化した粳や粳殻、炭化した稲藁や稲葉などの植物遺体である。このような稲に関係する資料を出土する最も古い新石器文化遺跡は、総て長江下流域に集中している。今のところ東アジアにおいて最も古い稲作農耕遺跡と考えられる浙江省余姚県の河姆渡遺跡や桐郷県の羅家角遺跡は、何れも長江の下流域に位置し、その年代は前5000～前4500年を遡

るものと考えられている。一方、雲南省内において稲資料を出土する遺跡の年代は、前2000年以前に遡りえない。量博満氏は、1984年の第8回東南アジア考古学会に於て「中国新石器時代の稲作」と題する発表をおこなっている<sup>(8)</sup>。その中で量氏は、中国の稲資料を出土する遺跡の数が50ヶ所ほど存在することを紹介し、稲資料に検討を加えた結果、「長江流域では、河姆渡・羅家角→馬家浜→崧沢→良渚の序次で文化的継承関係をもっている諸文化が知られ、コメ栽培は早く河姆渡・羅家角期にすでに盛んであった。……稲作の展開が雲南方面より揚子江に沿い、その下流域に到達したという農学の立場からの主張は、今日の資料の限りからすると、考古学的には証しえないのである」と述べていられる。

北京大学考古系教授の嚴文明先生が、1988年秋に来日され、日本考古学協会静岡大会に参加された。その折り、「中国稲作農耕の起源と展開」と題されて基調講演をされた。その時に示された長江下流域に稲作農耕の起源を求める見解は、現時点で最も合理的な説と思われるので、嚴文明教授の講演の骨子をここに紹介しておく<sup>(9)</sup>。

「紀元前5000年以前のある時期、長江下流域には、今日に比べかなり気温が高くまた底湿地が広がり、普通野生稻の生息に適した環境が出現したと考えられる。その時期に、華南地方に生息していた普通野生稻が、長江中・下流域まで拡大し、先住民族は稲を採集し、やがて稲の性格を熟知し、ついに稲の栽培を開始したと推定され、その年代は前8000～前7000年よりは古くないと考えられる。長江下流域とその周辺は稲作起源と関連が深く、涼しい気候条件を好む粳稻は、この地で発生したと考えられ、この地に栽培稻が出現した後は、残っていた野生種の品種と雑交を繰り返し普通野生種の稲の姿がほとんど見られなくなったものと考えられる。

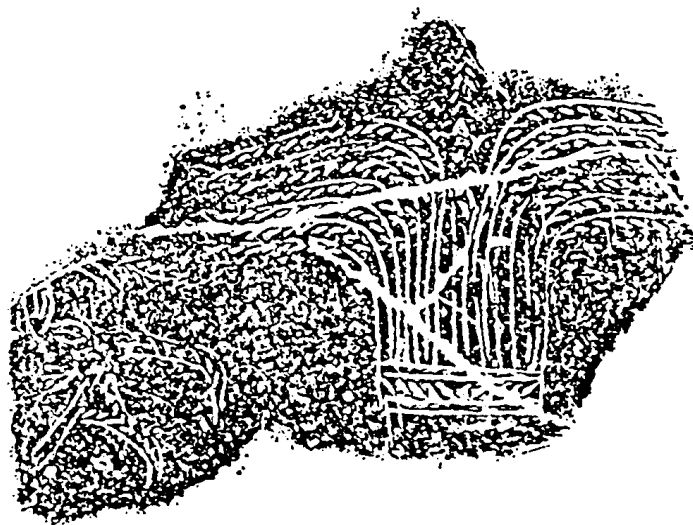
前5000～前4000年の時期に長江下流域には既に稲作が存在したが、最も集中した地域は長江最下流域で、河姆渡遺跡や羅家角遺跡によって代表される。前4000～前3000年に入ると稲作は長江沿いに中流域に伝播し、大溪文化などが出現する。前3000～前2000年に入ると稲作は、湖南省の中部や江西省の中部の長江中流域に広がり、浙江省の南部、安徽省、山東省においても稲が栽培され、代表的な遺跡には湖北省の屈家嶺遺跡などがある。山東省棲霞県の楊家圈遺跡においても前2000年代の稲資料が発見されている。前2000～前1000年に入ると稲作の範囲はさらに広がり、福建省や台湾省さらに雲南省にも拡大する。」

以上が、嚴文明教授による「長江下流域稲作文化発生説」の骨子であるが、嚴文明教授は、東アジアに於ける稲作の伝播ルートについても述べられている。

「稲作は中国で発生してから、中国国内に伝播したのみならず、アジア地域に広く伝播していった。その中で日本への伝播ルートについては、長江下流域から山東半島・遼東半島・朝鮮半島・日本九州への陸路を中心とする半円弧形状のルートが最も可能性が有る。稲作は総合的な文化成果なので種籾の伝播だけでなく、稲作の技術、経験、農具などが総合的に伝播するはずで、偶発的な漂流で稲作農耕が伝播するのは難しい。稲作が長江流域から遼東半島・朝鮮半島までの北上に長い時間が必要であったが、朝鮮半島北部から日本までの南下はごく短い時間で稲作技術の伝播が可能であった。」

以上が嚴文明教授の、中国長江流域から日本への稲作伝播に関する御説の概略の紹介である。現在、新石器時代に属する稲資料を出土したと報告のある遺跡の数は、すでに60ヶ所近くになり、北は河南省・陝西省から南は広西省・広東省にいたる極めて広い地域に分布している。

その中で、最も古い一群は既に度々述べた長江の最下流地域の遺跡で、年代的には新石器時代前期の終わりから中期初頭にあたる。それらの遺跡には、浙江省余姚県河姆渡遺跡第4層<sup>(40)</sup>・桐郷県羅家角遺跡<sup>(41)</sup>、江蘇省呉県草



第1図 稲穂紋拓本 河姆渡遺跡第4層出土

鞋山遺跡第10層<sup>92</sup>、上海市青浦県崧沢遺跡下層<sup>93</sup>などがある。

河姆渡遺跡の年代に関しては、C14年代測定の結果が発表されている。河姆渡遺跡のT21トレンチ第4層出土の橡実は前4775±140年（経樹輪校正）で、またT17トレンチ第4層の木炭は前5010±100年（経樹輪校正）の値を示している。この第4層からは面積400平方mにわたって、厚さ20～50cmの炭化した稲粳、稲葉、稲茎が出土している。報告によると、これらの稲は人工水稻栽培の粳稻であるという<sup>94</sup>。河姆渡遺跡の稲の鑑定報告は、粳稻のみで粳稻の報告はない。また、河姆渡遺跡のT221トレンチの第4層からは稲穂紋のある陶盆が出土している（第1図）。この稲穂紋は、一束の稲で上方で二方向にわかれている。羅家角遺跡の第3・第4層からは、黒色に変化した稲が出土している。T120トレンチあるいはT119トレンチの第3層から出土した稲には粳稻と粳稻があり、粳稻と粳稻の割合は概ね7対3であった。この第3層の年代については、文化的に馬家浜文化早期に属することが知られている。同じ馬家浜文化早期の第4層のH16号灰坑の葦は、C14年代測定で前4955±155年（経樹輪校正）あるいは前5090±150年（経樹輪校正）の値を示している。草鞋山遺跡の第10層のH2灰坑あるいはH7灰坑からは、土塊状になった稲粳が出土している。江蘇省農業科学院の鑑定結果では、H2灰坑出土の稲は粳稻で、H7灰坑出土の稲は粳稻であった。これらの稲が出土した第10層の年代はC14年代測定によると、T202—10木板が前4325±205年（経樹輪校正）またT703—10木炭が前4065±145年であった。また崧沢遺跡下層出土の稲に関しては、1962年に浙江農業大学農業系による鑑定結果が発表され、粳稻と報告されている。また、後に『崧沢……新石器時代遺址発掘報告』においては粳稻と粳稻の2種類があると報告されている。

河姆渡遺跡に於いては、粳稻の発見はないが、羅家角遺跡及び草鞋山遺跡、崧沢遺跡下層からは粳の出土があった。これらの粳稻の年代は、いずれも前5000年を前後する年代である。一般的に、粳稻はある時期に粳稻から分かれた稲であると言われている。羅家角遺跡に於ける粳稻と粳稻の割合は7対3前後で、河姆渡遺跡に於いては粳稻はみられず、粳稻が優位にある状態である。このような状況は、新石器時代前期終末から中期初頭の稲資料が、粳稻から粳稻が分化して間もない状況を示しているようにも思える。

稲作が長江中流域に伝播した時期は、概ね新石器時代中期にあたり、この時期の遺跡としては、安徽省潜山県の薛家岡遺跡<sup>95</sup>、江蘇省南京市の廟山遺跡<sup>96</sup>、湖北省枝江県の関廟山遺跡<sup>97</sup>などがある。薛家岡遺跡は、長江の北岸

に位置し、南京からは250 km近く上流である。薛家岡遺跡の報告では稲資料の出土は明らかでないが、嚴文明教授によれば、住居址の焼土中に稲粃が混じっていたと言う。この遺跡の第3期文化層出土の草木灰のC14年代測定の結果は、前3220±125年（経樹輪校正）であった。関廟山遺跡の堆積は、龍山文化である青龍泉第3期文化、屈家嶺文化、大溪文化からなっているが、大溪文化層中の焼土から稲粃痕が発見されている。関廟山遺跡の大溪文化層から出土した木炭のC14年代測定結果は、前3990±260年（経樹輪校正）を示している。

次の段階は、稲作が長江中・下流域の全般に広がり、湖南・湖北・江西・浙江・江蘇・安徽の各省において稲資料が見られるほか、黄河下流域の山東省、珠江流域の広東省においても稲作資料が見られる時期である。この時期は概ね新石器時代後期の前半にあたる。この時代の代表的な遺跡には浙江省呉興の銭山漾遺跡第4層<sup>18</sup>、湖北省京山県の屈家嶺遺跡<sup>19</sup>・隕県の青龍泉遺跡<sup>20</sup>、山東省棲霞県の楊家圈遺跡<sup>21</sup>、などが存在する。

銭山漾遺跡の第4層からは、炭化した稲粃が発見されている。浙江農学院の鑑定によれば、粒が短形の粳稻と、粒が長形の籼稻があるという。屈家嶺遺跡出土の焼土中からは、大量の稲粃が発見されている。屈家嶺遺跡焼土中の稲粃に関しては、中国農業科学院・丁穎の鑑定結果が発表されている<sup>22</sup>。それによると、屈家嶺遺跡の稲の多くが粳稻に属するものであるという。青龍泉遺跡では壁土中から粃殻、稲葉、茎が発見されているが、詳しいことは不明である。1980年秋に北京大学が発掘した楊家圈遺跡の龍山文化前期の灰坑から住居址の壁であった焼土が出土し、その焼土中から粟と稲の出土が報告されている。稲資料には稲粃、稲葉、茎などがあったが、中国農業科学院の俞履圻教授は、これらの稲資料を粳稻と鑑定している<sup>23</sup>。また報告では、これらの稲が水稻であることを力説するが、稲の栽培とあわせて畑で粟を栽培していたことが知られる。筆者としては、畑栽培の粟の出土によって、楊家圈遺跡出土の稲が水稻である可能性と同時に、陸稻である可能性をも合わせて考えておくべきであると思う。楊家圈遺跡の稲が出土した同じ灰坑から出土した木炭は、C14年代測定の結果、前2440±130年（経樹輪校正）とでている。

新石器時代最後の段階に入ると、稲作の分布は今日の分布と概ね一致してくる。北は山東・河南省から、南は広西・広東省まで、東は福建・台湾省から日本、西は四川・雲南省に至る範囲で稲資料の出土が知られる。年代的に



は新石器時代後期の後半，つまり龍山文化後期にあたるが，地域によって良渚文化，石峽文化，曇石山文化の名称で呼ばれる文化にあたる。この時期の代表的な遺跡には，広東省曲江県の石峽遺跡<sup>24</sup>，福建省福清県の東張遺跡<sup>25</sup>，四川省西昌市の礼州遺跡<sup>26</sup>，雲南省元謀県の大墩子遺跡<sup>27</sup>，賓川県の白羊村遺跡<sup>28</sup>，台湾省台北市の芝山岩遺跡<sup>29</sup>などが知られる。

広東省曲江県石峽遺跡の文化は，上層・中層・下層の3時期に分けられ，中層と下層から稲資料が発見されている。下層が概ね新石器時代後期の前半から後半の一部にかかるものと想定される。稲資料は炭化した稲粒・葉・茎などの形で発見されているほか，焼土塊中に含まれているものもある。これらの稲資料に対しての広東省農業科学院による鑑定では，籼稻と粳稻が報告されている。また，華南農学院農学系の鑑定によれば47号墓出土の稲粒は籼稻型で，42号墓出土の稲粒は粳稻型であるという。また，焼土中の稲粒，稲殻には粒の大小，形状の不一致が認められ，これは，当時の農業栽培が比較的原始的な段階にあったことを示すとみられる。石峽遺跡のM26号墓出土の木炭のC14年代測定は，前2480±150年（経樹輪校正）とでていますが，若干古すぎるようにも思える。概ね玉器などの関係から良渚文化併存期と考えたい。

福建省の東張遺跡は曇石山文化に属する遺物を出土しているが，焼土中の稲葉，稲茎の品種などは不明である。

曇石山文化の標準遺跡である福建省閩侯県の曇石山遺跡からは，今だ植物遺体としての稲類の発見は無い<sup>30</sup>。曇石山遺跡の下層・中層文化は基本的に新石器時代後期の文化に属し（中層の末期は青銅器時代に入っている可能性も考えられる），下層からは1点の双孔貝刀が出土し，また中層からは多数の双孔貝刀が出土している。福建省の地理的条件から考えて，これらの収穫用具としての貝刀は，稲の収穫に用いられた物に間違い無い。曇石山遺跡中層出土のカキ貝に対するC14年代測定は，前1320±155年（経樹輪校正）で，比較的新しい年代を示している。下層の土器は縄紋と附加堆紋の施された土器，円圈紋と弦紋のある土器などで，龍山文化土器的な様子が見られる。

雲南省元謀県の大墩子遺跡のK7住居址から出土した3個の陶罐内の炭化した穀類は，中国科学院植物研究所の鑑定の結果では粳稻と判明している。大墩子遺跡第5トレンチの柱穴の木炭はC14年代測定の結果，前1470±155年（経樹輪校正）とでている。雲南省賓川県の白羊村遺跡の貯蔵穴内からも多

くの稲粃と稲茎が出土しているという。磨製石器には有孔の石刀86点と鋸歯を有する石鎌2点がある。これらの稲は主としてこの遺跡の晩期に属し、この晩期とさほど差の無い白羊村遺跡の早期の年代は、C14年代測定で前2165±105年（経樹輪校正）を示している。台湾省台北市の芝山岩遺跡の文化層底部で発見された炭化米は、粒が小さく、粳稻と考えられている。この文化の年代は前2000年から前1000年と考えられている。

## 2 周辺地域への伝播

稲作農耕の起源を考える上で、自然条件と野生稻の分布から重要視されるのは華南と雲南省そして東南アジアの新石器時代遺跡である。しかし残念ながらこの方面の新石器時代資料及び発掘された稲資料には限りがある。

華南の新石器文化開始の時期と稲作農耕開始の時期との間には、かなりの時間的差がある。ある見方では、華南の新石器文化が開始され土器が出現するのは前10000年前後に求められるが、両広地区に稲作が出現するのは前2000年代に入ってからである。新石器文化の開始と、稲作の開始との間には約8000年の開きがある。

広西壮族自治区桂林市の甌皮岩洞穴では、上層、下層二つの堆積があり、下層の年代は前7000年以前、上層の年代は前5500年前後といわれているが、C14年代測定では最も古い年代としては前9360±180年の測定結果がある<sup>9)</sup>。出土する土器は極めて原始的な早期の土器の外、赤色土器、灰色土器があり、紋様には縄紋以外に画紋、藍紋も見られる。石器には磨製の斧、鏃があり、これらの磨製石斧、石鏃は両面、両側縁を丁寧に磨製している。また貝刀（貝庖丁）も3点出土し、石杵も発見されている。これらの石器や貝器の存在から原始的な農業の存在が推定されるが、それが稲作農耕であった証拠は何もない。考古学的資料の上で稲資料が出てくるには、石峽文化までまたなければならない。

一方、多くの学者によって栽培稻の起源があるとされる雲南省においては、稲作資料を出土する新石器文化にそれほど古い物は無い。元謀県大墩子遺跡のC14年代は前1470±155年（経樹輪校正）で、また賓川県白羊村のC14年代は前2165±105年（経樹輪校正）であった。このほかにも雲南省内では多数の新石器文化遺跡が発見されているが、今のところ前2000年頃よりさらに古く遡る遺跡の発見はない。

タイの東北部コン・ケン州にあるノンノクタ（Non Nok Tha）遺跡は、

新石器時代から鉄器時代にいたる多くの墓が発見されている遺跡である。新石器時代と青銅器時代の両文化層から粳稻と考えられる炭化米と、稲の圧痕のある土器片が発見されている。この遺跡の古い段階には縄紋のある土器の外、刻紋、彩色紋のある土器が多い。しかしこれらの土器はこの遺跡の青銅器時代の土器とあまり変わりはないという。ノンノクタ遺跡の新石器時代文化と青銅器時代文化の間には、さほどの時間的差は無いものと推定される。

ヴェトナムの古い稲作遺跡としては、ドンダウ (Dong Dau) 遺跡とドンティエン (Dong Tien) 遺跡などが知られる。ドンダウ遺跡はヴィンフー省ヴィンライ郡ミンタン村にあり、遺跡第4層(下層)の第2区第11号炉址から焼けた稲が出土した。第4層はヴェトナム後期新石器文化初頭に属し、前1000年前後と考えられている。出土したこれらの稲は粳稻に属するとの見解が示されている。ドンティエン遺跡は、タイホア省マー河流域にあり、この遺跡からもフングエン文化に属する稲粳が出土し、やはり粳稻ではないかと思われるが、詳細は不明である。フングエン文化の年代は前1000年前後であろう。ハノイ市南西のハソンビン省ソムチャイ洞穴からも稲粳が発見され、その年代が前4000年を遡るとの説が出されたこともあるが、一方、西暦700年の絶対年代を示したとの情報もあり確かではない<sup>42)</sup>。

華南地方は、稲作農業起源の上で重点的に調査されるべき場所であるが、まだ十分な考古資料が発見されていない。稲作農耕に関し確実に遡れるのは、石峡文化までで、古く見ても前2000年代中頃までである。東南アジアのタイ、ヴェトナムで発見されている稲資料も、また确实なところでは前1000年頃までと思われる。東南アジアのこれらの稲資料の年代が確かにそれ自体前1000年前後としても、常識的にはさらに古い稲資料が存在してしかるべきである。

山東半島に於いては、楊家圈遺跡出土の稲資料によって知られるように前2000年代にすでに稲作農耕が開始されていた。稲作の技術は、山東半島から渤海湾の廟島群島を経て遼東半島へ伝播し、その後、朝鮮半島へ伝播したと推定されるが、廟島群島、遼東半島に於ける稲作考古資料の発見を知らない。朝鮮半島へ伝播した稲作技術は半島を南下し、日本の九州に至ったと推定される。

朝鮮半島に於いて考古学的な稲資料が、出現する年代は、山東半島楊家圈遺跡の前2000年に比較するとかなり年代の下がった前1000年から前400年の頃と考えられる。朝鮮半島に於ける初期稲作農耕と関係すると思われる遺跡

には、平壤市三石区域湖南里の南京遺跡、京畿道驪州郡占東面の欣岩里遺跡、忠清南道扶余郡草村面の松菊里遺跡などがある<sup>93</sup>。南京遺跡のコマ形土器文化期に属する36号住居址からは、粟、大豆などの炭化物とともに炭化米が出土し、粒の計測結果から粳稻と考えられている。この36号住居址の時期を、後藤直氏は、一応前5世紀前後と考えられている。欣岩里遺跡からは大麦や黍の植物遺存体が出土したほか、12号住居址、14号住居址から炭化した稲粒も出土し、稲粒の計測結果から粳稻と考えられている。松菊里遺跡の54地区1号住居址からは、395gの炭化した稲が出土し、粒の計測からやはり粳稻と考えられている。欣岩里遺跡、松菊里遺跡とも朝鮮南部地域の前期無紋土器を出土し、後藤氏はそれらの遺跡の年代を前5世紀から前4世紀と考えていられる。欣岩里遺跡の木炭に対するC14年代測定の結果は、前1030±70年、前970±70年などの年代が示されている。また、松菊里遺跡のC14年代測定の値は、前995±60年、前615±90年が示されている。土器の編年による相対年代と絶対年代の間には若干の開きがあるように思われる。

山東半島楊家圈遺跡の年代から朝鮮半島の稲資料出現までの年代の間には、約1500年から1000年の差がある。この間を埋める考古資料が当然無ければいけないが、まだ発見された例は無いようである。しかし、前1000年前後に遼東半島から朝鮮半島に稲作農耕の技術が伝播された可能性は高い。中国楊家圈遺跡に於いては稲粳といっしょに粟が発見されているが、朝鮮の南京遺跡に於いても炭化した稲といっしょに粟が発見されているし、欣岩里遺跡に於いても大麦と黍が伴出している。これら楊家圈、南京、欣岩里遺跡の遺跡では、稲作と同時に粟などの穀類を畑で栽培していたことが知られる。華北に於ける稲作の全てが、水田で行われていた証拠はなく、従って、これら三つの遺跡の稲は、水稻の可能性を持つと同時に陸稻の可能性をも有している。朝鮮半島と日本で発見されている稲資料の年代差は、中国大陆の初期稲資料の年代と比較するとそれほど大きな物ではない。朝鮮半島に於ける稲作農耕開始時期は、日本に於ける稲作農耕開始時期よりも早い、それほど差が無いものと考えられる。日本の稲作農耕の開始は佐賀県の菜畑遺跡や福岡県の板付遺跡下層での水田遺構の発見によって縄紋時代晩期中頃あるいは後半に、確実に開始されていたと考えられている。さらにそれ以前の縄紋後期末に遡る可能性も推定されている。朝鮮半島に稲作技術が伝播した後さらに日本に伝播するために、それほど時間を必要としなかったと考えられる。

稲作農業文化は、嚴文明教授が述べられたように総合的な文化である。従ってその文化が伝播する条件も、総合的な条件が必要である。仮に新石器時代のある日、漁業を専らとする漁師が漂流して日本の九州近くの離島に、米の飯を持って漂着したとしても、稲作は伝播しえない。脱穀された米では種粃となりえない。漁業を専らとする漁師が種粃を持参している可能性は極めて少ない。仮に船に乗っていた人物が稲作を熟知した人間であったとしてもある特定の地域への渡航を目的とせずに種粃を持ち、各種農機具を携えて船に乗るはずがないし、また持参する種粃は日本の気候風土にあったものでなければならぬ。新石器時代の長江下流域の稲を直接日本に持ち込んで良い結果が得られるとは思えない。長時間の人間による農業行為と自然淘汰の中からしだいに周辺地域に適応する稲が生まれ、長い時間を掛けて北方へ向かって稲作が伝播し、その中で、日本の土地と風土に合った稲が生まれ、それが日本の土地に根付いたものと推定される。

以上のように、中国国内、中国周辺部とも今のところ河姆渡文化より古い稲栽培文化は発見されておらず、河姆渡文化あるいは馬家浜早期文化が東アジアに於ける最古の水田稲作栽培文化であるとの結論は、正しいようである。また、河姆渡遺跡のある長江下流域から、西へ向かって長江上流域へ、北へ向かって山東・遼寧地域へ、南へ向かって華南・東南アジア方面へ伝播していったとの推定も、我々が今日入手している考古資料を見る限りにおいては極めて合理的な考えである。

### 3 収穫具から見た稲作農耕の伝播

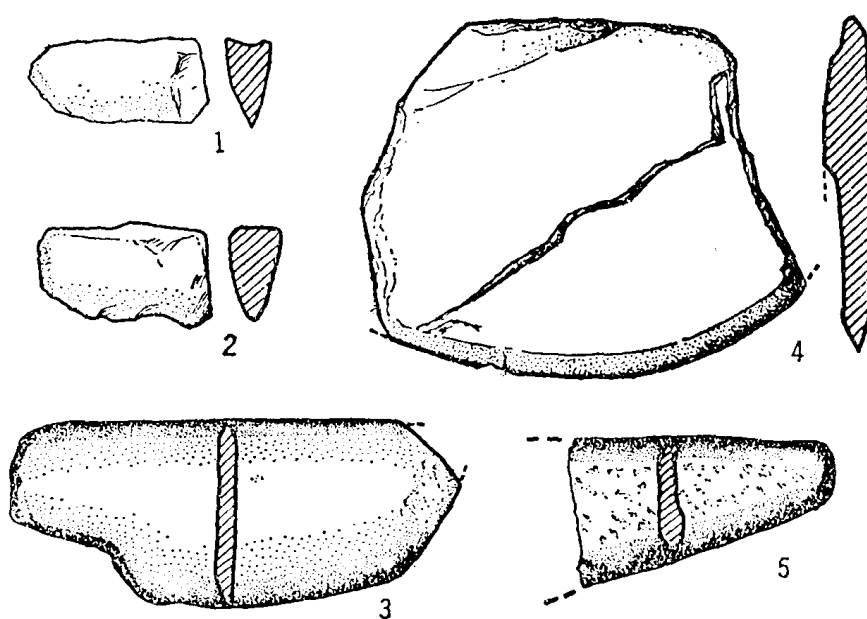
#### 稲作地帯における収穫具の伝播

稲や粟などの穀類を収穫するには、それに適した石刀（石庖丁）や石鎌などの収穫用具が必要であったと推定される。黄河流域の粟を栽培した磁山・裴李崗文化には鋸歯を有する作りの良い石鎌が存在し、また、仰韶文化を代表する西安の半坡遺跡に於いても両端に抉りのある石刀が多数発見されている。このように粟栽培遺跡においては、初期の栽培遺跡から収穫用具である石鎌や石刀が粟植物遺体に伴って出土している。石刀の類は一般的に粟栽培地域に顕著に見られ、長江流域の稲栽培地域では初期の収穫具の状態が不明瞭で、たとえば河姆渡遺跡第4層の遺物には、収穫具らしい道具が見あたらない。新石器時代に於ける粟栽培地域と稲栽培地域との区分は、その境界地域に於いては困難であるが、概ね前者は黄河水系地域、後者は長江水系以南

の地域と推定して大きな間違いはない。稲作栽培地域の収穫具に関してその展開を遺跡分布図によって考えてみた。その結果、収穫具の伝播は長江下流域から概ね扇状に、西方・南方に広がっていくことが明かとなった。この稲作に伴う収穫用具の伝播状態は、稲作の起源が長江下流域に有ることを示す傍証となるものである。中国稲作地帯新石器時代の収穫具出土遺跡をまとめ（第1表）、その分布地図（第1地図）を作製した。以下その実体について述べる。なお第1地図に示した遺跡は、あくまでも稲作栽培に関係が有ると推定される遺跡で、粟栽培地帯からは、これに倍する収穫具が発見されている。

すでに紹介してきたように、稲作農耕の起源は長江下流域の浙江寧紹平原にあると考えられるが、この地域において収穫具らしい遺物が最初に見られるのは浙江省羅家角遺跡第4層においてである。羅家角遺跡からは、24点の石刀が発掘され総て無孔である。多くは頁岩などの片岩を加工したもので表面に自然面を残し、刃部は磨製されている（第2図）。

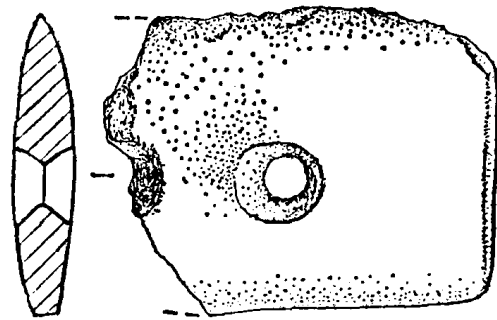
羅家角遺跡第4層から出土した2点の石刀は、1式と呼ばれている。形状は不規則で、比較的小型で、刃部は片面あるいは両面から研磨されている（第2図の1・2）。一見、大汶口遺跡の石刀に類似するが、大汶口遺跡の遺物より原始的な感じを有している。羅家角遺跡の報告では、この遺物を収



第2図 石刀 羅家角遺跡出土 1・2四層，3三層，4二層，5一層

穫用具として取り扱っているが、これが収穫用具である積極的な証拠はない。しかし、この石器が大汶口遺跡の石刀に類似する点と、稲が存在する以上必ず収穫用具が必要である点から、この石刀類を収穫用具とする考えに間違いは無いであろう。すでに紹介したように羅家角遺跡第4層の芦のC14年代は前5090±150年（経樹輪校正）であった。この石器を収穫具と認めると稲作農耕地域最古の石刀となる。羅家角遺跡に於いては、羅家角遺跡の第3・2・1層においても石刀が存在していた。

羅家角遺跡の石刀の次の時代の収穫具としては、河姆渡遺跡第2層から発見された2点の石刀がある。馬家浜文化期の遺物と考えられ、河姆渡遺跡第2層のC14年代測定値は前4320±95年（経樹輪校正）であった<sup>64</sup>。その内の1点は、磨製された有孔の石刀で残長7.5cmほどである（第3図）。この石刀の形は、基本的に黄河流域に見られるものと同じで、



第3図 石刀 河姆渡遺跡第2層出土

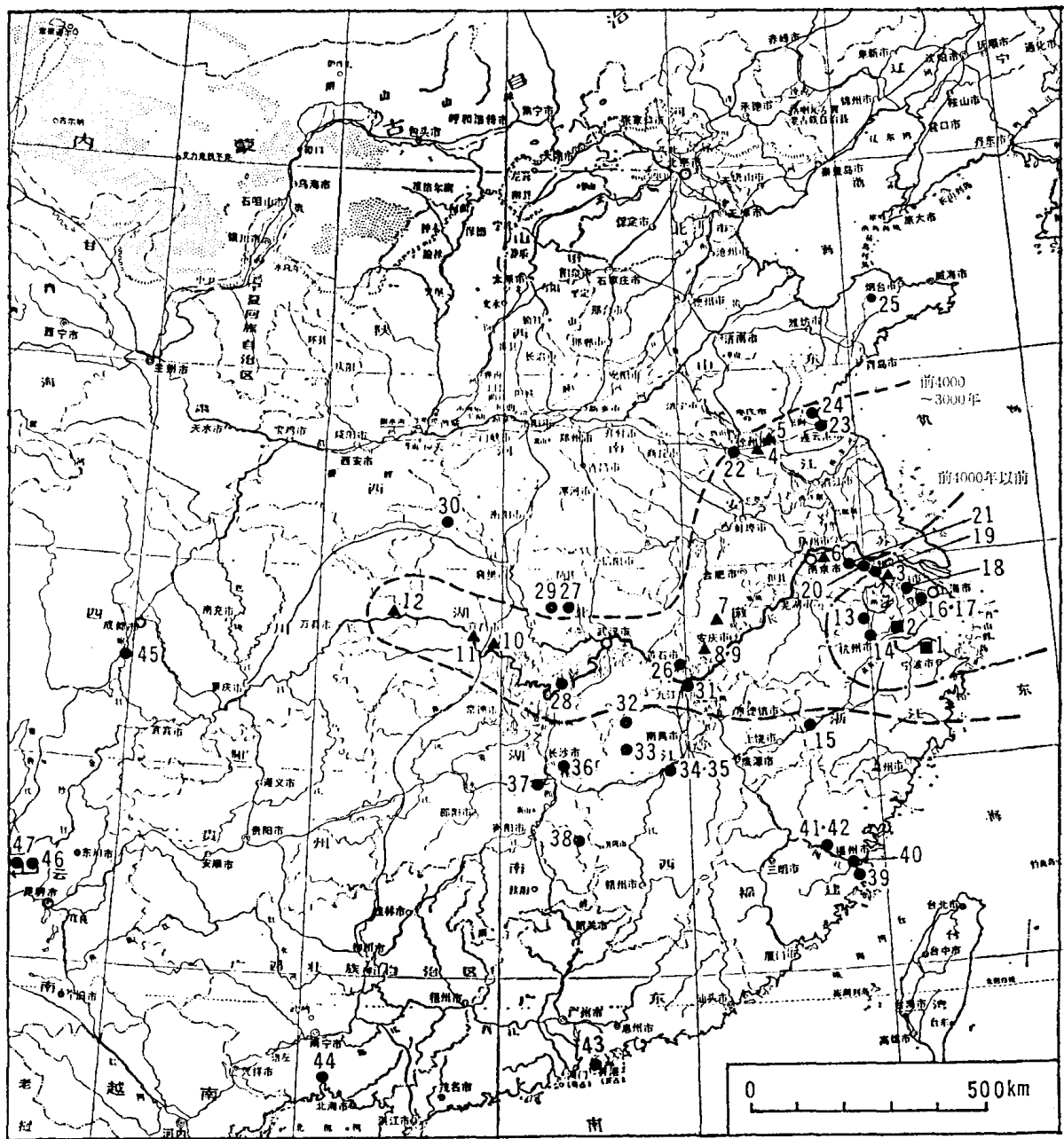
粟栽培地域で用いられた石刀の形がそのままこの地に伝播した可能性が考えられる。

初期稲作農耕文化地帯の収穫具を出土する遺跡は、数が限られ地域も浙江寧紹平原である。この時代は、概ね新石器時代前期から中期前半にあたり、前4000年以前を年代の基準とする（第1表、第1地図の角印）。

さらに次の時代になると稲作収穫具の分布は、著しく広がる。西は、長江に沿って湖北省と四川省の境界付近に達し、北は、淮河河口に至っている。

淮河河口の江蘇省邳県大墩子遺跡からは磨製有孔の石刀・玉刀・骨鎌が発見されている<sup>65</sup>。大墩子遺跡の年代はかなり幅があるが石刀・骨鎌は花庁期に属し、また玉刀はそれより古い可能性がある。邳県の劉林遺跡からも有孔の石刀と石鎌が出土している<sup>66</sup>。大墩子遺跡や劉林遺跡に近い連雲港市の二澗村遺跡からは、青蓮岡文化に属するとされる稲粃殻の発見も伝えられている<sup>67</sup>。

長江流域では南京市の北陰陽營遺跡から石刀が出土している<sup>68</sup>。湖北省潜山県薛家岡遺跡は薛家岡類型の標準となる遺跡で、薛家岡第3期の文化から36点の石刀が発見されている<sup>69</sup>。これらの石刀には、2・3・5・7・9・11・13孔の物などがあり、すべて副葬品用の道具と考えられ、実用の道具で



第1地図 中国稲作地帯収穫具（石刀・貝刀・石鎌・貝鎌）出土遺跡地図  
 番号は第1表による。■印 前4000年以前，▲印 前4000～前3000年，●印 前3000～前1000年。

はない。この時期の実用的な石刀としては安徽省望江県汪洋廟遺跡や楓嶺墩遺跡の物が知られる<sup>40)</sup>。

湖北省内では宜昌市付近のいくつかの遺跡で石刀が発見されている。宜昌市の大溪文化に属する中堡島遺跡の第1～4期の文化層では、29点の無孔の



石刀が発見されている<sup>40</sup>。さらに長江上流の四川省と湖北省境界付近の四川省巫山県大溪遺跡では石刀1点と貝鎌8点が出土している<sup>42</sup>。大溪文化後期の遺物で、同時期の収穫具としては西端の遺物である。この時代は、新石器文化中期の後半に当り、前4000～前3000年を年代の基準とする（第1地図の三角印）。

新石器時代後期にはいると稲作農耕文化に伴う収穫用具遺物の分布は、さらに広がり北は山東半島、西は雲南省内、南は広東省以南に及んでいる（第1地図の黒丸印）。

長江下流域には、この時期も収穫具を出土する遺跡が多い。代表的な遺跡として、浙江省呉興県の銭山漾遺跡<sup>43</sup>・杭州市の水田畝遺跡<sup>44</sup>、上海市馬橋遺跡<sup>45</sup>、江蘇省武進県寺墩遺跡<sup>46</sup>、その他がある。銭山漾遺跡からは113点の石刀が発見され、石刀の形には半月形、長方形などが存在する。これらの石刀の大部分は良渚文化に属するものと推定される。

長江中流域では江西省九江県沙河街の大王嶺遺跡<sup>47</sup>・清江県營盤里遺跡<sup>48</sup>、湖北省京山県の屈家嶺遺跡<sup>49</sup>・鄖県の青龍泉遺跡<sup>50</sup>、四川省樂山市安谷郷の陳黄村遺跡<sup>51</sup>、雲南省賓川県の白羊村遺跡<sup>52</sup>、元謀県の大墩子遺跡<sup>53</sup>などが知られる。これらの遺跡は新石器時代遺物を含む遺跡であるが、第1表に示した江西省内の遺跡の多くが、殷、西周、春秋時代の遺物を含み、石刀などの収穫具と時代の関係がはっきりしていない。ことによるとこの地に石刀などの収穫具が伝播した時代は前1000年代を下るかもしれない。

雲南省賓川県の白羊村遺跡からは、磨製有孔の石刀86点と鋸齒を有する2点の石鎌が出土している。早期の第9号住居址出土の木炭のC14年代測定の結果は前2165±105年（経樹輪校正）であった。また、雲南省元謀県の大墩子遺跡からも磨製有孔の石刀16点が発見されている。年代的には白羊村遺跡よりは下るかもしれない。いずれにしても前2000年ごろの雲南省中央部にはすでに稲作に伴って石刀が伝播していたことは資料の上からも明かである。

福建省内の曇石山文化に属する諸遺跡からも多数の石刀・貝刀の発見が伝えられている。曇石山遺跡の標準である閩侯県曇石山遺跡からは、石刀2点、石鎌5点、貝刀11点が発見されている<sup>54</sup>。年代的には、曇石山遺跡出土の貝片のC14年代測定で前1320±155年（経樹輪校正）の結果がでている。福清県の東張遺跡からも16点の石刀が発見されている<sup>55</sup>。この遺跡の新石器時代文化層の焼土からは稲が発見されている。東張遺跡の文化層は新石器時代から西周・戦国時代に及んでいるが、これらの石刀が新石器時代の遺物で

あれば、曇石山文化時代の稲の収穫具である可能性を考えることができる。ほかに閩侯県の溪頭遺跡の上層文化・晩期灰坑中からも小数ではあるが、石刀、石鎌、貝刀などの収穫具の出土が伝えられている<sup>59</sup>。年代的には青銅器時代に入っているものと推定される。

両広地区に於いては、基本的に有孔の磨製石刀は流行しなかったようである。広東省寶安県の蚌地山遺跡の報告では、有孔の石刀と称する物の写真が示されているが、有孔石刀であるのか、有孔石斧であるのか定かでない<sup>59</sup>。

香港の東湾遺跡からも石刀出土の報告がある<sup>58</sup>。この石刀は磨製であるが無孔で、長さ14.5cm、幅6.6cm、厚さ0.8cmの大ききで、収穫具と断定してよいのか、いけないのか不明である。この石刀の年代は、出土層位がはっきりしないため不明であるが、東湾遺跡からは新石器時代遺物のほか、西周、東周、漢代以降の遺物も出土している。広西省欽州県の独料遺跡からは、石鎌3点、石刀2点の出土が伝えられている<sup>59</sup>。いずれも磨製薄手の石器で無孔である。これらの石鎌・石刀が属する年代については、必ずしも明かでないが、報告では、新石器時代後期の遺物と推定してゐる。

新石器時代後期から中原の殷周時代に入っても、珠江流域の両広地区に於いては、石刀の使用が一般化していた形跡が認められない。広東省曲江県の石峡遺跡からは籼稲を中心とした相当量の稲が発見されているが、石刀などの収穫具の発見は伝えられていない。

江蘇省北部の地域に於いても稲作に伴ったと推定される石刀の発見がある。稲を出土している江蘇省連雲港市の二澗村遺跡<sup>60</sup>、同じく江蘇省の贛榆県下廟墩遺跡<sup>61</sup>、徐州市の高皇廟遺跡<sup>62</sup>などから石刀、貝刀や石鎌、貝鎌の発見が伝えられている。

稲に伴う石刀として、最も北から発見された遺物は、山東省棲霞県の楊家圈遺跡から出土した石刀である。楊家圈遺跡からは稲資料と粟資料の出土があり、この遺跡出土の石刀の一部が、稲栽培と関係があると考えて差し支えない。山東地区では、稲栽培が開始される以前から粟栽培が行われ石刀が使用されていたが、稲栽培の開始に伴って稲の収穫具に転用されたのであろう。楊家圈遺跡の年代は、先に述べたように前2400年前後と推定される。

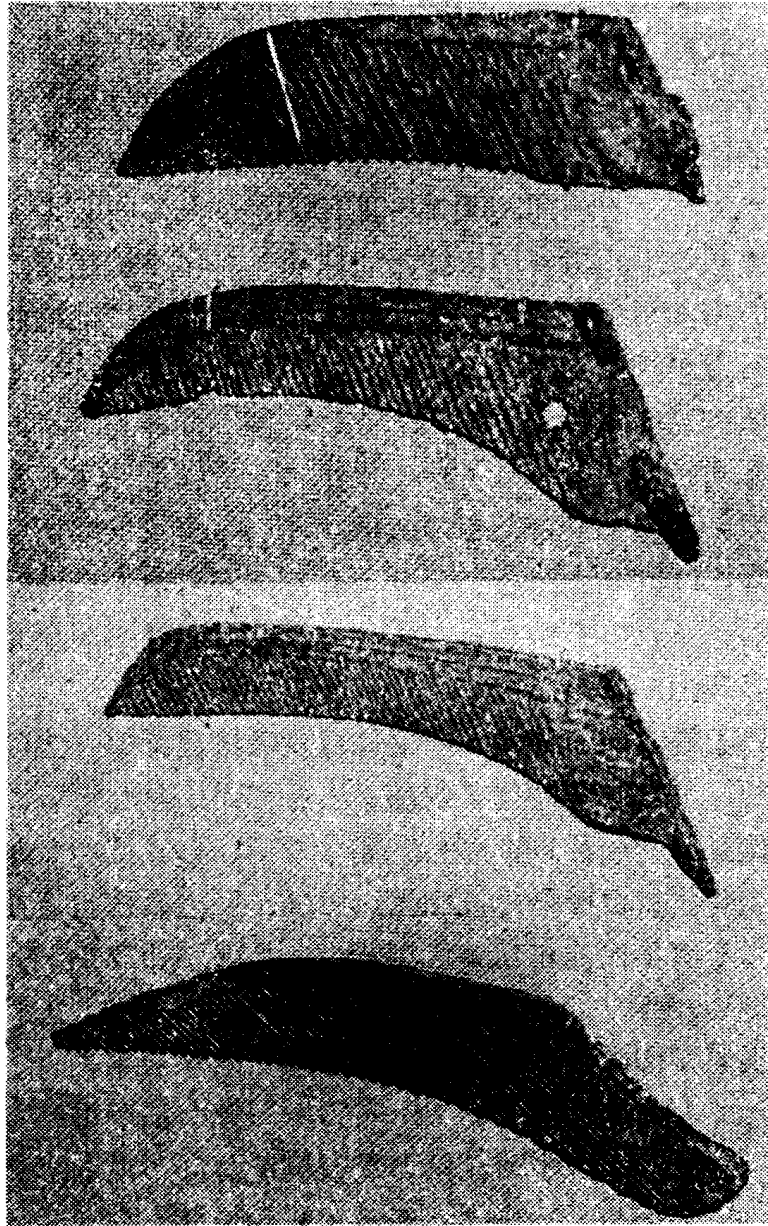
以上紹介してきた長江流域を中心とする地域の収穫具の伝播と分布は、稲作農耕の発生と伝播に重なる部分が多い。両広地区に関しては稲作農耕の伝播に伴って、必ずしも北の石刀が広がらなかったようであるが、これも興味深い現象である。新石器時代に稲作農耕が行われたと推定される地域の前40

00年以前には、長江最下流域の寧紹地域にのみ収穫具が存在する。この現象は稲作の発生と無関係ではない。前4000年～前3000年の間に石刀・貝刀・石鎌・貝鎌などの収穫具は長江を遡り、湖北省と四川省の境界線まで到達し、江蘇省と山東省南部の東支那海沿岸に於いては粟栽培地域と稲栽培地域が隣接していた可能性が強く、稲作に伴ったと推定される収穫具が江蘇省北部に於いても発見されている。前3000年～前1000年になると石刀・貝刀・石鎌・貝鎌などの収穫具は、四川省から雲南省に達し、南は福建省の曇石山文化中にも多くの収穫用具が存在する。また山東半島においては稲作と粟栽培が競合し、それに石刀が存在している。概ねこの時期には、黄河下流域から長江流域、閩侯流域に稲作農耕が伝播し、それに伴って石刀・貝刀・石鎌・貝鎌などの収穫具も同じ地域において稲の収穫のためにも使用されたと推定される。石刀・貝刀・石鎌・貝鎌などの伝播状況から見ても雲南省に稲作農耕の起源を求める考えは成り立たないようである。両広地域に於いて、稲作農耕の確実な伝播があったにもかかわらず、一般的な収穫具が発見されないことについてはその理由がわからない。

#### 戦国・漢代の収穫具……日本への稲作農耕伝播経路の一つの可能性

長江流域に於いて新石器時代に収穫具として用いられていた石刀・石鎌・貝刀・貝鎌の類が、その後、いつの時期まで用いられていたかは、必ずしも明かでない。江蘇省鎮江県の馬迹山遺跡では、21点の石刀と4点の石鎌が出土しているが、その年代はC14年代測定で、上限が前1540±90年、下限が前1195±105年であった<sup>63</sup>。C14年代測定の結果が示す値は、殷代に当たるが、出土している幾何学印紋硬陶の器形・紋様は、西周末年まで下がるものと推定される。少なくとも西周末年まで、石刀・石鎌の類が用いられていたことを示している。また、江西省清江県の營盤里遺跡群からも59点の石刀が発見されている<sup>64</sup>。この遺跡の年代は、新石器時代後期から戦国時代に至り、石刀が、いずれの時代に属するか明確ではないが、西周末年まで下る遺物も含まれると想定される。同じく江西省の修水県山背地区の諸遺跡においても新石器時代から春秋時代に至る紅陶、印紋硬陶に混じって多数の石刀が発見されている<sup>65</sup>。それぞれの石刀が属する年代は明らかでないが、やはり西周末年までの石刀が多数あるものと推定される。

春秋時代の長江下流・中流域では、第4図に示したような青銅の収穫用具が用いられた。石刀形の銅銚もあるし、鋸鎌形の銅鎌もある。湖北省江陵県の雨台山遺跡の第403号楚墓から1点の銅鎌が発見されている<sup>66</sup>。江蘇省内で



第4図 青銅鋸鎌 上海博物館蔵

は六合県の程橋遺跡第2号墓で銅鎌が発見されていて<sup>67)</sup>、また安徽省貴池県の里山遺跡から銅鋸が発見されている<sup>68)</sup>。上海市の戚家墩遺跡においても石鎌と銅鎌が伴出している<sup>69)</sup>。長江中流・下流においては、石器から鉄製農具が出現するまでの間、青銅の農具が用いられたと考えられ、その間の収穫具には青銅鋸や青銅鎌が存在する。青銅鋸の南端の出土例は、広東省羅定県背夫山遺跡の物で、東南アジア諸遺跡出土の銅鋸との関係も考えられる<sup>70)</sup>。中

国における銅銚, 銅鎌の出土遺跡を第2表と第2地図に示した。

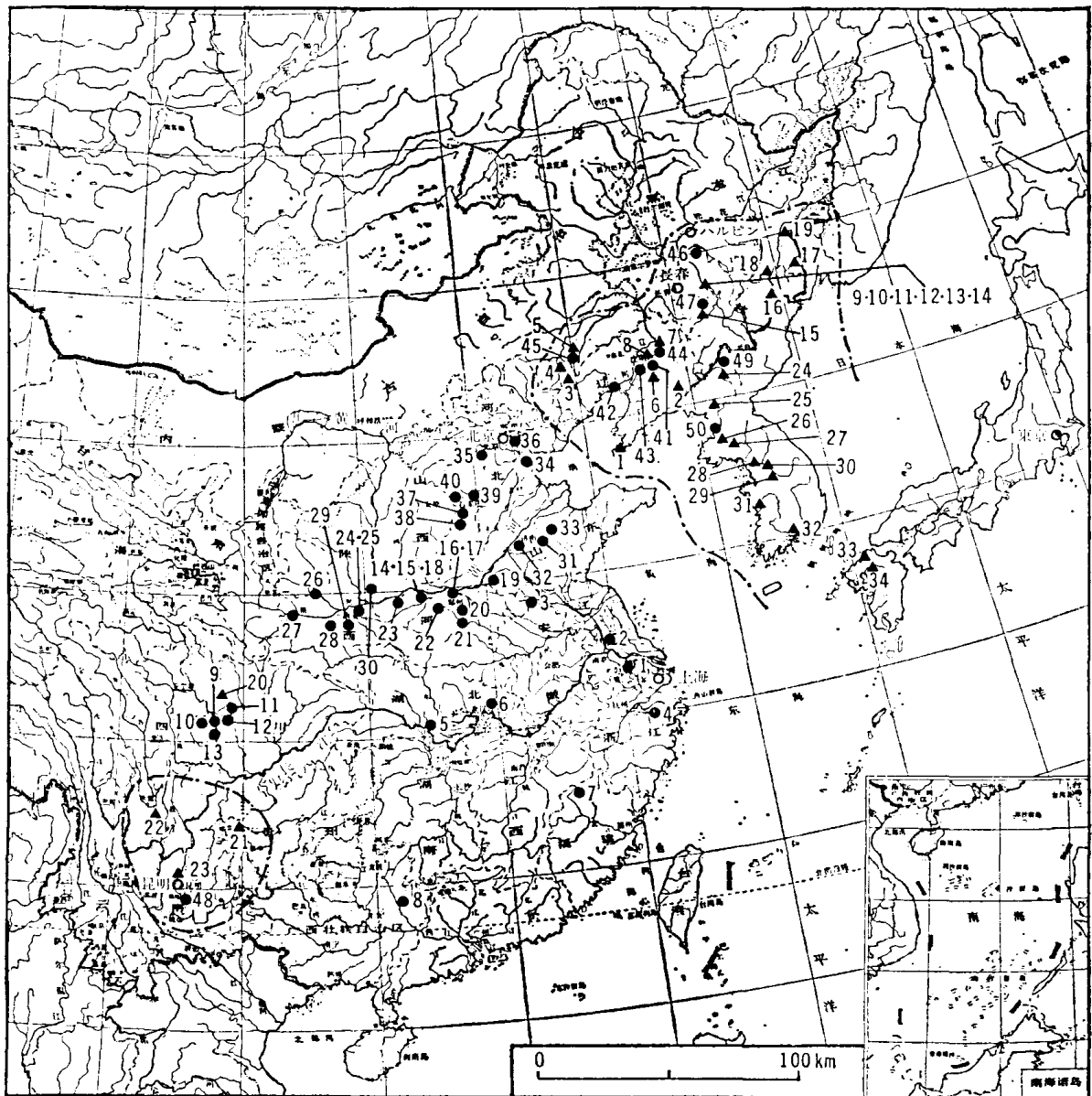
中国における鉄生産は, 一般的に春秋時代後期に開始されたと考えられるが, 戦国時代から漢代にかけて, 鉄製の農具が概ね中国全体に行き渡るようになる。農具の内, 収穫具に関してもその傾向は認められ, 東北地区, 雲南地方, 西藏などの一部地域からの鉄鎌の発見例が数量的に少ないほかは, 概



第2地図 銅銚, 銅鎌出土遺跡地図 番号は第2表による。

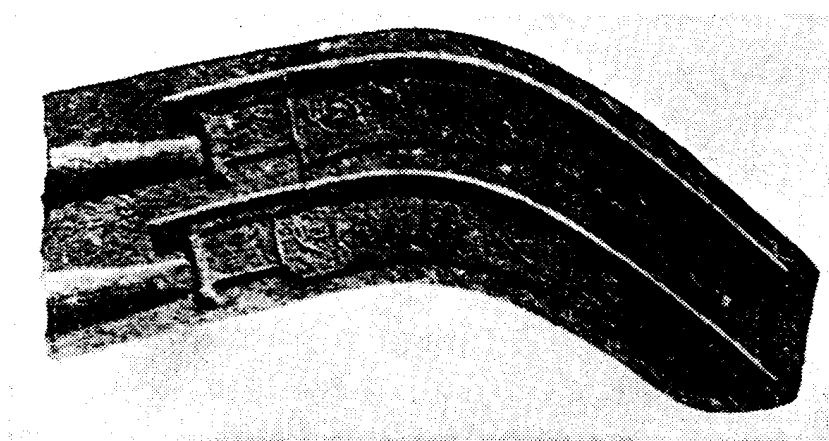
ね全地域から多くの鉄製の鎌が発見されるようになる。鉄鎌には、鉤鎌、鍔鎌（大鎌）、矩鎌などがあり、鉤鎌は、多くの地区の戦国遺跡、前漢遺跡から発見されているが、後漢に入ると鍔鎌が出現する。戦国・漢代の鉄鎌の分布の様子を示したのが、鉄鎌の分布図（第3表、第3地図）である。

鉄鎌は、すでに戦国時代初期に出現していたと推定される。河北省易県の

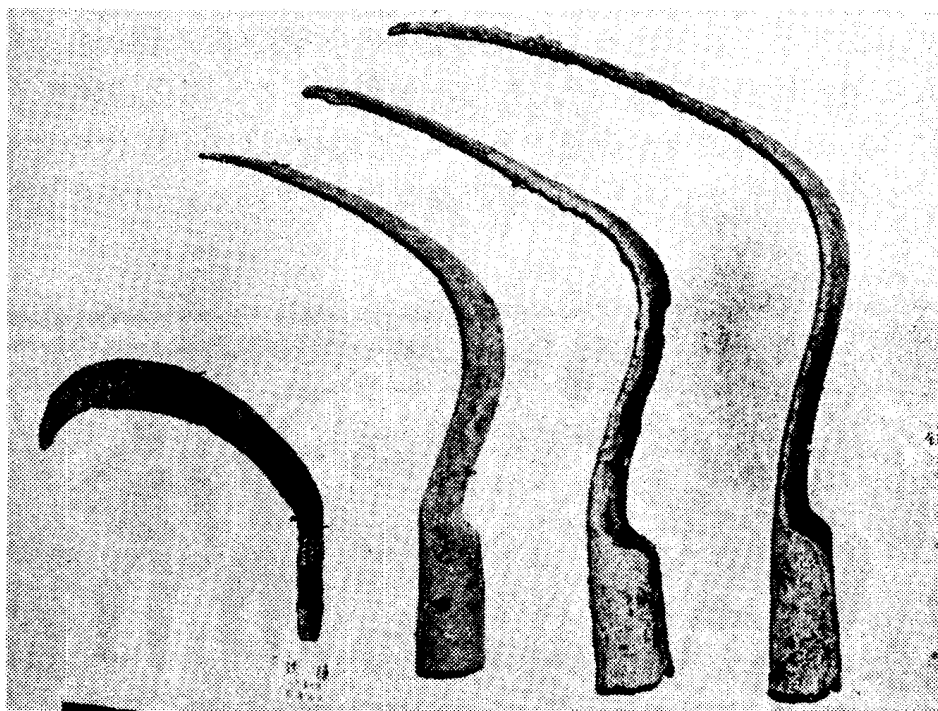


第3地図 戦国・漢代鉄鎌・石刀・鉄銚出土遺跡地図（朝鮮半島の遺跡は東周時代併存）  
番号は第3・4表による。●印 鉄鎌出土遺跡，▲印 石刀・鉄銚出土遺跡

燕下都出土の鉄鎌など一部の報告には春秋時代に属するとされる鉄鎌の報告もあるが積極的な根拠はなく、戦国時代まで下らせるべきである。河北省興隆県からは、戦国時代に属する鉄鎌の鉄范が発見され（第5図）<sup>44</sup>、また河南省登封県の戦国時代韓国の陽城の製鉄遺跡からも、鉄鎌の陶范が発見されている<sup>45</sup>。河南省博物館には河南省新鄭県発見の戦国時代の鉄鎌が展示されているが、この時代、鉄鎌を含む鉄製農工具の生産が高度な水準に達してい



第5図 鉄鎌鉄范 興隆県出土



第6図 鉄鎌 四川省新津県出土

た事が知られる。中国稲作地帯の戦国時代の鉄鎌としては、江蘇省武進県の奄城遺跡<sup>73</sup>や江陵県紀南城遺跡出土の鉄鎌などがある<sup>74</sup>。漢代の長江流域における収穫用具は、鉄鎌が一般的で、江蘇省高郵県の邵家溝遺跡 発見の鉤鎌<sup>75</sup>、湖北省黄陂県の作京城遺跡出土の鎌<sup>76</sup>、四川省新津県の牧馬山遺跡 発見の鐵鎌や矩鎌があるほか（第6図）、四川省内ではおおくの後漢時代の画像磚が発見され、それにしばしば、鉄鎌を用いた収穫図が描かれている（第7図）。

また、洛陽・長安を含む黄河流域においても収穫具として鉄鎌が広く用いられていた事は言うまでもないが、本論の目的とするところと直接関係が無いので省略しておく。

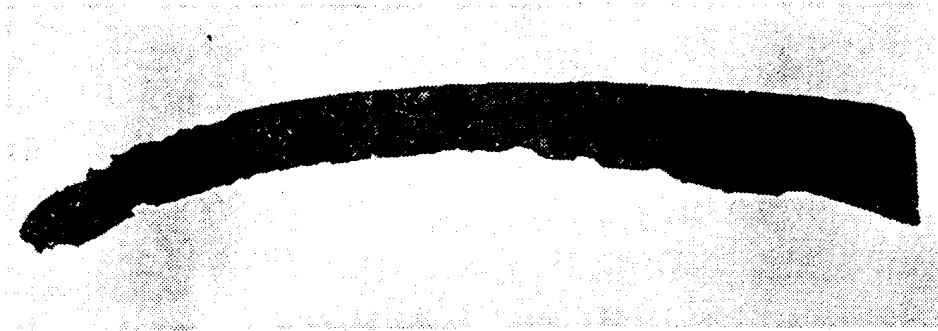
東北地域の遼寧省、吉林省からも、戦国時代、漢代の鉄鎌は発見されている。代表的な遺跡としては、遼寧省遼陽県の三道壕遺跡などが知られる<sup>77</sup>。三道壕遺跡からは34点の鉄鎌が出土したと報告されているが詳しいことはわからない（第8図）。また吉林省の榆樹県の老河深遺跡の中層からも13点の漢代鉄鎌の出土が報告されているなど、多数の戦国・漢代遺跡から鉄鎌の発見が伝えられている<sup>78</sup>。また朝鮮半島の慈江道渭原郡の戦国・漢代初頭の龍淵洞遺跡や楽浪の貞柏里第356号墓から鉄鎌の発見が伝えられているが、漢文化の鉄鎌が、朝鮮半島の北西部に及んだ物と解釈される<sup>79</sup>。

しかし、東北地方で注目すべきことは、戦国・漢代まで下る遺跡からも多数の石刀が出土することである。吉林省吉林市の騷達溝遺跡からは戦国後期と考えられる半月形石刀1点<sup>80</sup>、吉林市永吉楊屯の大海猛遺跡からは、秦から漢代にかかる石刀19点が発見され、この遺跡では渤海時代の地層からも5点の石刀が発見されている<sup>81</sup>。この渤海時代とされる石刀がはたして渤海



第7図 収穫図画像磚 成都羊子山出土





第8図 鐵鎌 三道壕出土



第9図 石刀 吉林省博物館蔵

時代の遺物であるか否かについては、報告者自身も若干の疑問を持っている。また吉林市江北の土城子遺跡からは戦国漢代にかかると思われる石刀9点が発見されている<sup>82</sup>。遼寧省旅大市の南山裡遺跡からは漢代の陶壺内から鉄鏃が発見されている<sup>83</sup>。また黒龍江省の寧安県の東康遺跡からは52点の石刀と12点の石鎌の出土が伝えられている<sup>84</sup>。

中国の戦国・漢代に併存する時代の朝鮮半島に於いても、収穫具としての石刀が盛行している。韓国考古学研究会編による『韓国考古学地図』には石刀の出土地点126箇所が示されているが<sup>85</sup>、実際には、はるかに出土地点は多いものと推定される。朝鮮半島に於ける石刀の主な分布地は、鴨緑江流域、大洞江流域、漢江流域、洛東江流域などの概ね朝鮮半島全域にわたっている。朝鮮半島の石刀に関しては、山東龍山文化に見られる石刀との関係を指摘する説が比較的強い。王巍氏は、中国考古学研究会第7回大会に於いて、山東半島から遼東半島に入り朝鮮半島に伝播する石刀の系譜図を示された<sup>86</sup>。妥

当な見解であろう。中国から朝鮮への石刀の伝播は前1000年前後であった可能性が強いが、中国の東北地方に於ける石刀の出現はさらに古く考えられ、河北省側から粟栽培文化と共に、遼寧省を経路とする伝播が考えられる。また山東半島から遼東半島への石刀の伝播経路は稲作の伝播経路と重なる可能性も強い。朝鮮半島の石刀の全てが、稲作農耕と結び付く物ではないが、南京遺跡、欣岩里遺跡、松菊里遺跡の稲資料と結び付けて考えると、いくつかの遺跡の石刀は稲の収穫具として用いられたと考えてよいであろう。

戦国時代から漢代併存期の東アジアに於ける収穫具の分布を見ると、戦国・漢代の中国東北地方から朝鮮半島にかけては、石刀・鉄銚、鉄鎌が共存している。また、雲南・貴州地域でも、石刀・鉄銚・鉄鎌が共存して用いられ、この地方が稲作農耕の面で、東北地方と並んで後進的であったことが知られる。中国東北部から朝鮮半島にかけての石刀の分布は、一連の文化として捕らえる事が出来る。戦国時代から漢代の長江下流域には、石刀の分布はまったく認められず、使用されている収穫具の主なものは鉄鎌だけである。戦国時代から漢代（朝鮮半島は東周時代併存）にかけての東アジアに於ける収穫具の分布を示したのが、第4表と第3地図である。

日本の稲作文化の源流を考えると、東アジアにおける石刀と鉄鎌分布の趨勢を忘れてはならない。この時期に石刀の使用が認められるのは、中国東北地方・朝鮮半島と、雲南・貴州地方で、朝鮮半島における戦国・漢代併存時代の石刀の分布は、極めて顕著な物がある。日本の弥生時代の石庖丁は当然の事ながらこの中国東北地区・朝鮮半島の石庖丁の伝播経路の最終地点に位置している。もし、江南から直接稲作農耕が日本に伝播したと仮定すると、日本への稲作文化伝播が春秋戦国時代ならば、日本へ銅鎌・銅銚が伝播したはずで、また日本への稲作文化の伝播が戦国・漢代以降であれば稲とともに鉄鎌が日本に伝播したはずである。日本の初期稲作文化つまり弥生文化前期以前の遺跡から銅鎌や鉄鎌が発見されるべきはずである。日本の弥生文化の最初の時期には鉄鎌は認められない。

日本の稲作農耕が鉄鎌を伴わずに開始されたと言う事実、そして日本の稲作農耕が石庖丁を伴って開始されている事実は、日本への稲作農耕の伝播経路を明確に物語っている。つまり日本の稲作農耕は、間接的に江南の稲作文化と関係が有るにしても、直接的には中国東北部の南辺つまり遼東半島付近から朝鮮半島を経由して伝播したことを示している。

## おわりに

本論の前半「1 中国の古代稲, 2 周辺地域への伝播」は, 筆者が学生のために『中国新石器時代考古学概説』として準備した原稿の中から, 中国稲作農耕に関係する部分を抜き出し, 若干の推敲を加えた物である。従って前半部分は, 論文ではなく, 今日の古代稲作農耕文化研究の現状紹介である。後半の「3 収穫具から見た稲作農耕の伝播」に於いて, 若干の私見を述べた。まず, 長江下流域に於いて前4000年以前に収穫具としての石刀の使用が導入開始され, 稲作農耕の拡大と共に稲作地帯に石刀の使用が広がっていった可能性を示した。つぎに, 収穫具の面から日本への稲作農耕の伝播が山東・河北から遼寧を通して, 朝鮮半島を経て日本に伝わったことを示唆した。日本の弥生文化の石庖丁が朝鮮半島から伝播した物であることは万人の認めるところである。筆者の考えとして, もし長江下流域から直接稲作が日本に伝播した場合には(朝鮮半島南端を経由したとしても), 日本にまず銅鎌または鉄鎌が伝播すべきであったことを示し, 逆説的に華南, 華中から海路を経ての伝播経路を否定した。日本の弥生文化前期の収穫具が石庖丁である点から考え, すでに戦国・漢代に石刀の使用が終了し, 鉄鎌を使用していた長江下流域の稲作が, 日本に伝播したとの説は成り立たないはずである。

第1表 中国稲作地帯収穫具(石刀・貝刀・石鎌・貝鎌)出土遺跡表  
(C14年代は樹輪校正)

番号	遺跡名	所 在	文化・年代	文 献	資 料
1	河姆渡第2層	浙江省余姚県河姆渡	馬家浜 前4065±135	考古学報1978-1	石刀2(双面刃, 2孔)
2	羅家角	桐郷県羅家角	新石器前期	浙江省文物考古所學刊	石刀24
3	許巷	江蘇省無錫許巷	青蓮岡・良渚	考古1961-8	石刀1(有孔)
4	劉林	邳県劉林	劉林	考古学報1965-2	石刀3(有孔), 石鎌2
5	大墩子	邳県大墩子	馬家浜・花厅	考古学集刊1 考古学報1964-2	玉刀1, 石刀3, 骨鎌(?)
6	北陰陽營	南京市北陰陽營	北陰陽營	考古学報1958-1	石刀12, 石鎌
7	薛家岡	安徽省潜山県薛家岡	薛家岡Ⅲ 前3220±125	考古学報1982-3	石刀多数
8	楓嶺墩	望江県楓嶺墩	薛家岡	考古1988-6	石刀(有孔)
9	汪洋廟上層	望江県	薛家岡Ⅲ	考古学報1986-1	石刀2
10	関廟山	湖北省枝江県関廟山	大溪Ⅳ 前3545±145	考古1983-1	石刀(無孔)
11	中堡島	宜昌県中堡島	大溪Ⅰ～Ⅵ	考古学報1987-1	石刀29

12	大溪	四川省巫山縣大溪	大溪	考古學報1981-4	石刀1, 貝鏃8
13	錢山漾	浙江省吳興縣錢山漾	前2630±135	考古學報1960-2	石刀113 (有孔)
14	水田畝	〃 杭州水田畝	新石器後期	考古學報1960-2	石刀3
15	營盤山	〃 江山縣營盤山	新石器後期	浙江省文物考古所學刊	石刀, 石鏃
16	福泉山	上海市青浦縣福泉山	良渚	文物1984-2 文物1986-10	石刀3
17	馬橋5層墩	〃 馬橋	良渚	考古學報1978-1	石刀1, 石鏃
18	綽仙蠡墩	江蘇省崑山縣綽仙蠡墩	良渚	文物1984-2	石刀, 石鏃
19	寺墩	〃 無錫市仙蠡墩	良渚	文物參考資料 1955-8	石刀6 (有孔)
20	寺墩	〃 武進縣寺墩	良渚	考古1984-2 文物1984-2	石刀(無孔), 玉刀1 (有孔)
21	馬迹山	〃 鎮江市馬迹山	殷·西周	文物1983-11	石刀21
22	高皇廟	〃 徐州市高皇廟	龍山·殷	考古學報1958-4	石刀, 貝鏃
23	二澗村	〃 連雲港市	龍山	考古1962-3	石刀1
24	下廟墩	〃 贛榆縣下廟墩	龍山	考古1962-3	石刀1
25	楊家圈	山東省棲霞縣楊家圈	龍山	史前研究1984-3	石刀
26	易家山	湖北省蕪春縣易家山	龍山	考古1960-5	石刀11
27	齋神堡	〃 雲夢縣齋神堡	龍山	考古1987-2	石鏃1
28	烏林磯	〃 洪湖縣烏林磯	龍山	考古1987-5	石刀1, 貝刀4
29	屈家嶺	〃 京山縣屈家嶺	屈家嶺 前2635±145	京山屈家嶺	石鏃3
30	青龍泉	〃 鄖縣青龍泉	龍山	考古1961-10	石刀 (有孔)
31	大王嶺	江西省九江縣沙河街	殷·西周	考古學集刊2	石刀7 (有孔)
32	山背	〃 修水縣山背	新石器後期· 西周·戰國	考古1962-7	石刀9 (有孔)
33	太平岡	〃 宜豐縣太平岡	新石器後期· 殷	考古1983-12	石刀8
34	築衛城	〃 清江縣築衛城	新石器後期	考古1976-6 考古1982-2	石刀10 (有孔)
35	營盤里	江西省清江縣營盤里	龍山·殷·西周	考古1962-4	石刀59(有孔·無孔)
36	樟樹潭	湖南省瀏陽縣樟樹潭	龍山	考古1965-7 考古學文化論集	石刀
37	岱子坪	〃 湘鄉縣岱子坪	新石器後期	湖南考古輯刊2	石刀1 (有孔)
38	南坪	〃 安仁縣南坪	新石器後期	考古1960-6	石刀2 (有孔)
39	東張	福建省福清縣東張	疊石山	考古1965-2	石刀16
40	浮村	〃 福州市浮村	新石器後期	考古學報1958-2	石刀3
41	疊石山	〃 閩侯縣疊石山	前1320±155	考古學報1976-1	石刀2, 石鏃5, 貝刀11
42	溪頭	〃 閩侯縣白沙	疊石山	考古1980-4 考古學報1984-4	石刀2, 石鏃1
43	東灣	香港東灣	新石器後期	考古學報1957-4	石刀1
44	独料	廣西欽州縣独料	新石器後期 前2420±135	考古1982-1	石刀2, 石鏃3
45	陳黃村	四川省樂山市安谷鄉	新石器後期	考古1988-1	石刀1 (有孔)

46	大墩子	雲南省元謀縣大墩子	前1470±155	考古學報1977-3	石刀16(有孔), 貝刀79(有孔)
47	白 羊 村	“ 賓川縣白羊村	前2165±105	考古學報1981-4	石刀86(有孔), 石鏃2

第2表 銅銍・銅鏃出土遺跡表

番号	遺跡名	所 在	文化・年代	文 獻	資 料
1	戚 家 墩	上海市金山縣	春秋・戰國	考古1973-1	銅鏃1, 石鏃1
2	西 施 山	浙江省紹興縣西施山	戰 國	考古1979-5	銅鏃1
3	朱 孟	“ 嵊縣朱孟	春 秋	文物1972-3	銅鏃1
4	龍 溪 港	“ 長興縣龍溪港	春秋・戰國	考古學集刊5	銅鏃1
5	洪 山 港	“ 長興縣洪山港	春秋・戰國	“	銅鏃2
6	蘇 州 城	江蘇省蘇州市	春秋・戰國	文物1980-8	銅鏃6
7	葑 門	“ 蘇州市葑門	春秋・戰國	文物1982-2	銅銍2, 銅鏃4
8	高 淳 潭	“ 高淳縣	春秋・戰國	農業考古1982-2	銅鏃
9	金 壇 壇	“ 金壇縣	春秋・戰國	農業考古1982-2	銅鏃
10	句 容 容	“ 句容縣	春秋・戰國	農業考古1982-2	銅銍, 銅鏃
11	華 蓋 山	“ 連雲港市華蓋山	西周・春秋	農業考古1985-2	銅鏃
12	六 合 墩	安徽省六合縣	春 秋	考古1974-2	銅鏃1
13	九 里 墩	“ 舒城縣九里墩	春 秋	考古學報1982-2	銅鏃9
14	貴 池 里	“ 貴池縣里山	春秋・戰國	文物1980-8	銅銍4
15	下 寺 灣	河南省淅川縣下寺灣	春 秋	文物1980-10	銅鏃2
16	山 灣	湖北省襄陽縣山灣	春 秋	江漢考古1983-2	銅鏃1
17	雨 台 山	“ 江陵縣雨台山	春秋・戰國	江陵雨台山楚墓	銅鏃1
18	背 夫 山	廣東省羅定縣背夫山	戰 國	考古1986-3	銅鏃1
19	石 碑 村	雲南省呈貢縣石碑村	前 漢	文物資料叢刊3 考古1984-3	銅銍27, 鐵鏃13,
20	天 子 廟	“ 呈貢縣天子廟	戰 國	考古學報1985-4	銅銍1, 鐵鏃2
21	石 寨 山	“ 晉寧縣石寨山	前 漢	石寨山發掘報告	銅鏃5

第3表 戰國・漢代鐵鏃出土遺跡表

番号	遺跡名	所 在	文化・年代	文 獻	資 料
1	奄 城	江蘇省武進縣奄城	戰 國	江蘇省出土文物選集	鐵鏃1
2	邵 家 溝	“ 高郵縣邵家溝	後 漢	“	鐵鏃1
3	高 皇 廟	“ 徐州市高皇廟	後 漢	考古學報1958-4	鐵鏃
4	西 施 山	浙江省紹興縣西施山	戰 國	考古1979-5	鐵鏃1
5	紀 南 城	湖北省江陵縣紀南城	戰 國	考古學報1982-3	鐵鏃
6	作 京 城	“ 黃陂縣作京城	漢	江漢考古1985-4	鐵鏃1
7	漢 城	福建省崇安縣漢城	前 漢	農業考古1988-2 P474	鐵鏃

8	銀山嶺	廣西平樂縣銀山嶺	後漢	考古學報1978-4	鐵鏃 1
9	五龍鄉	四川省大邑縣五龍鄉	秦	考古1987-7	鐵鏃 3
10	寶興	“ 寶興縣	漢	考古1982-4	鐵鏃 1
11	綿陽	“ 綿陽縣	漢	文物參考資料 1954-9	鐵鏃 6
12	牧馬山	“ 新津縣牧馬山	漢	考古1959-8	鐵鏃 3(鈎鏃·鏃鏃)
13	天回山	“ 成都天回山	後漢	考古學報1958-1	鐵鏃 1
14	洛陽糧倉	河南省洛陽市	戰國	文物1981-11	大鐵鏃13, 小鐵鏃 6
15	燒溝	“ 洛陽市燒溝	漢	洛陽燒溝漢墓	鐵鏃 3
16	南關外	“ 鄭州市南關外	戰國	考古學報1973-1	鐵鏃 2
17	東史馬村	“ 鄭州市東史馬村	後漢	考古學集刊 1	鐵鏃 16
18	中州路	“ 洛陽市	後漢	洛陽中州路	鐵鏃 2
19	固圉村 2 号	“ 輝縣固圉村	戰國	輝縣發掘報告	鐵鏃 1
20	鄭韓故城	“ 新鄭縣	戰國	文物資料叢刊 3	鐵鏃, 鐵鏃陶范
21	石固	“ 長葛縣石固	漢	考古1982-3	鐵鏃 2
22	陽城	“ 登封縣陽城	戰國	文物1977-12	鐵鏃陶范
23	澠池	“ 澠池縣	漢	農業考古1982-2 P 204	鐵鏃 1
24	秦刑徒墓	陝西省臨潼縣趙背戶	秦	文物1982-3	鐵鏃 2
25	秦馬廐坑	“ 臨潼縣始皇陵	秦	文博1985-1	鐵鏃 7
26	長武	“ 長武縣	漢	考古與文物 1982-1	鐵鏃 8
27	鬪鷄台	“ 寶雞市鬪鷄台	前漢	(中國歷史博物館)	鐵鏃 1
28	紅慶村	“ 長安縣紅慶村	漢	文物1954-9	鐵鏃
29	藍田	“ 藍田縣	前漢	文物1966-1	鐵鏃
30	芝川	“ 韓城縣芝川	前漢	考古與文物 1983-4	鐵鏃陶范
31	萊蕪	山東省萊蕪縣	前漢	文物1977-1	鐵鏃陶范
32	肥城	“ 肥城縣	後漢	農業考古1982-2 P 205	鐵鏃
33	齊故城	“ 臨淄齊故城	戰國	考古1961-6	鐵鏃 1
34	北倉	河北省天津市北倉	戰國	考古1982-2	鐵鏃 1
35	燕下都	河北省易縣	戰國	考古1962-1 考古1965-11	鐵鏃
36	興隆	“ 興隆縣	戰國	考古1956-11	鐵鏃陶范
37	午汲	“ 武安縣午汲	戰國	考古1957-4	鐵鏃
38	下潘王	“ 磁縣下潘王	漢	考古學報1975-1	鐵鏃 1
39	北莊	“ 定縣北莊	後漢	考古學報1964-2	鐵鏃
40	靈壽城	“ 平山縣靈壽城	戰國	農業考古1986-2	鐵鏃
41	三道壕	遼寧省遼陽市三道壕	前漢	考古學報1957-1 文物參考資料 1955-12	鐵鏃34, 鐵鏃 1
42	大泥洼	“ 錦州市大泥洼	戰國	考古1955-4	鐵鏃 2
43	羊草莊	“ 鞍山市羊草莊	戰國	考古學報1956-1	鐵鏃
44	連花堡	“ 撫順市連花堡	戰國	考古1964-6	鐵鏃 2, 鐵鏃 3

45	老虎山	內蒙古敖漢旗老虎山	戰 国	考古1976-5	鉄鎌 5, 鉄銚 1
46	老河深	吉林省榆樹県老河深	前漢・後漢	榆樹老河深	鉄鎌13
47	学古東山	“ 永吉県学古屯	前 漢	考古1981-6	鉄鎌 2
48	李家山	雲南省江川県李家山	前 漢	考古学報1975-2	鉄鎌 1
49	龍淵洞	慈江道渭原郡龍淵洞	漢	朝鮮古文化綜鑑 1	鉄鎌, 鉄銚
50	貞柏里 356号	平壤貞柏里356号	楽浪郡時代	朝鮮古文化綜鑑 2	鉄鎌 1

第4表 戦国・漢代，石刀・鉄銚出土遺跡表

(朝鮮半島の遺跡は東周時代併存)

番号	遺跡名	所 在	文化・年代	文 献	資 料
1	南山裡	遼寧省旅大市老鉄山	漢	南山裡	鉄銚
2	寬 甸	“ 寬甸県	戰 国	文物資料叢刊 3	鉄銚 6
3	南山根	內蒙古自治区昭烏達盟寧城県	夏家店上層 戰 国	考古学報1975-1	石刀 1 (半月形, 双孔)
4	夏家店	“ 昭烏達盟	夏家店上層	考古学報1974-1	石刀 4 (半月形, 双孔)
5	老虎山	“ 敖漢旗老虎山	戰 国	考古1976-5	鉄銚 1
6	三道壕	遼寧省遼陽市三道壕	前 漢	文物参考資料 1955-12	鉄銚 1
7	連花堡	“ 撫順市連花堡	戰 国	考古1964-6	鉄銚 3
8	新 楽	“ 瀋陽市新楽	新楽上層 春秋・戦国	考古学報1978-4	石刀32 (半月形, 双孔)
9	騷達溝	吉林省吉林市騷達溝	戰 国	考古1985-10	石刀(半月形, 単孔)
10	泡子沿	“ 吉林市泡子沿前山	戰 国	考古1985-6	石刀 2 (半月形, 双孔)
11	猴石山	“ 吉林市猴石山	戰 国	考古1980-2	石刀 9 (半月形, 双孔)
12	長蛇山	“ 吉林市長蛇山	戰 国	考古1980-2	石刀48 (半月形, 双孔)
13	西团山	“ 吉林市西团山	春秋・戦国	考古学報1964-1	石刀
14	土城子	“ 吉林市江北	戦国・漢	考古学報1957-1	石刀 9 (半月形, 双孔)
15	大海猛	“ 永吉県楊屯	秦・漢	考古学集刊 5	石刀19
16	百草溝	“ 延吉市百草溝	春秋・戦国・漢	考古1961-8	石刀, 石鎌 1
17	大城子	黒龍江省東寧県大城子	漢	考古1979-1	石刀 3, 石鎌 2
18	東 康	“ 寧安県東康	漢	考古1975-3	石刀53, 石鎌12
19	永台	“ 鷄西市永台	漢	考古1982-1	石刀 4
20	營盤山	四川省茂汶県營盤山	戰 国	考古1981-5	石刀 1 (長方形, 単孔)
21	可 楽	貴州省赫章県可楽	戰 国	考古学報1986-2	石刀 3
22	鰲鳳山	雲南省劍川県鰲鳳山	戰 国	文物1986-7	石刀 1
23	貢石碑	“ 昆明市貢石碑	前 漢	考古1984-3	鉄銚13

24	龍淵洞	慈江道渭原郡龍淵洞	漢	朝鮮古文化綜鑑 1	鉄鏟
25	細竹里	平安北道寧邊郡	無文土器	韓國考古学地図	石刀
26	石灘里	黃海道松林市	コマ形土器	〃	石刀21 (半月形, 双孔)
27	新興洞	黃海道鳳山郡	コマ形土器	〃	石刀8 (半月形, 单孔, 双孔)
28	駅三洞	京畿道江南区	無文土器	史学研究20	石刀
29	欣岩里	〃 驪州郡	無文土器	欣岩里住居址 1, 4	石刀
30	德豊里	〃 広州郡	無文土器	白山学報3	石刀
31	松菊里	忠清南道扶餘郡	無文土器	松菊里1	石刀
32	大坪里	慶尚南道晋陽郡		考古学5・6	石刀
33	板付	福岡県板付	弥生前期	考古学講座4 P278	石庖丁
34	太刀洗	福岡県太刀洗	弥生中期	日本の考古学3	石庖丁

注

- (1) 4 安志敏, 1984。
- (2) 18 嚴文明, 1982。
- (3) 50 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館, 1978。82 羅家角考古隊, 1981。
- (4) 37 佐原真・佐藤敏也, 1984。  
86 G. R. Sharma and D. Mandal, 1980。
- (5) 34 近藤英夫, 1984。
- (6) 85 渡部忠世, 1977。
- (7) 36 佐々木高明, 1982。35 佐々木高明, 1976。
- (8) 73 量博満, 1985。
- (9) 19 嚴文明, 1988。
- (10) 47 浙江省文管会・浙江省博物館, 1976。50 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館, 1978。
- (11) 82 羅家角考古隊, 1981。
- (12) 70 南京博物院, 1980。
- (13) 40 上海市文物保管委員会, 1962。43 上海市文物保管委員会, 1987。
- (14) 80 游修齡, 1976。
- (15) 3 安徽省文物工作隊, 1982。18 嚴文明, 1982。
- (16) 44 蔣纘初, 1959。
- (17) 53 中国社会科学院考古研究所湖北發掘隊, 1983。
- (18) 48 浙江省文物管理委員会, 1960 a。
- (19) 52 中国科学院考古研究所, 1965。
- (20) 56 長辨文物考古隊直屬工作隊, 1961。
- (21) 38 山東省文物考古研究所・北京大学考古實習隊, 1984。
- (22) 61 丁穎, 1959。
- (23) 19 嚴文明, 1988。
- (24) 13 広東省博物館・曲江県文化局曲石峡發掘小組, 1978。
- (25) 77 福建省文物管理委員会, 1965。



- (26) 84 礼州遗址聯合考古発掘隊, 1980。黄承宗, 1982。
- (27) 7 雲南省博物館, 1977。
- (28) 8 雲南省博物館, 1981。
- (29) 79 香港中文大学中国考古芸術研究中心, 1986。
- (30) 75 福建省博物館, 1976。
- (31) 25 广西壮族自治区文物工作队・桂林市革命委员会文物管理委員会, 1976。
- (32) 72 新田栄治, 1987。及び新田栄治, 1989年の飯島武次に対する私信による。
- (33) 30 後藤直, 1984。
- (34) 50 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館, 1978。
- (35) 67 南京博物院, 1964。
- (36) 68 南京博物院, 1965。
- (37) 83 李洪甫, 1985。
- (38) 65 南京博物院, 1958。
- (39) 3 安徽省文物工作队, 1982。
- (40) 2 安徽省文物考古研究所, 1986。78 望江县文物管理所, 1988。
- (41) 31 湖北省宜昌地区博物館・四川大学歴史系, 1987。
- (42) 39 四川省博物館, 1981。
- (43) 48 浙江省文物管理委員会, 1960 a。
- (44) 49 浙江省文物管理委員会, 1960 b。
- (45) 42 上海市文物保管委員会, 1978。
- (46) 45 常州市博物館, 1984。
- (47) 22 江西省博物館・九江市文化工作队, 1982。
- (48) 23 江西省文物管理委員会, 1962 a。
- (49) 52 中国科学院考古研究所, 1965。
- (50) 56 長辨文物考古隊直属工作队, 1961。
- (51) 54 中国社会科学院考古研究所四川工作队, 1988。
- (52) 8 雲南省博物館, 1981。
- (53) 7 雲南省博物館, 1977。
- (54) 75 福建省博物館, 1976。
- (55) 77 福建省文物管理委員会, 1965。
- (56) 76 福建省博物館, 1984。
- (57) 74 莫稚, 1957。
- (58) 58 陳公哲, 1957。
- (59) 25 广西壮族自治区文物工作队・欽州県文化館, 1982。
- (60) 27 江蘇省文物工作队, 1962。
- (61) 66 南京博物院, 1962。
- (62) 26 江蘇省文物管理委員会, 1958。
- (63) 57 鎮江博物館, 1983。
- (64) 23 江西省文物管理委員会, 1962 a。
- (65) 24 江西省文物管理委員会, 1962 b。
- (66) 32 湖北省荊州地区博物館, 1984。
- (67) 69 南京博物館, 1974。
- (68) 1 安徽省博物館, 1980。
- (69) 41 上海市文物保管委員会, 1973。

- (70) 81横倉雅幸, 1989。  
 (71) 60鄭紹宗, 1956。  
 (72) 55中国歴史博物館考古調査組・河南省博物館登封工作站・河南省登封県文物保管所, 1977。  
 (73) 71南京博物院・南京市文物保管委員会・江蘇省文物管理委員会・江蘇省博物館, 1963。  
 (74) 33湖北省博物館, 1982。  
 (75) 71南京博物院・南京市文物保管委員会・江蘇省文物管理委員会, 1963。  
 (76) 28黄陂県文化館, 1985。  
 (77) 63東北博物館, 1957。64東北文物工作隊, 1955。  
 (78) 17吉林省文物考古研究所, 1987。  
 (79) 5 梅原末始・藤田亮策, 1947。6 梅原末治・藤田亮策, 1949。  
 (80) 16吉林省博物館・吉林大学考古專業, 1985。  
 (81) 14吉林市博物館, 1987。  
 (82) 15吉林省博物館, 1957。  
 (83) 62東亜考古学会, 1933。  
 (84) 29黒龍江省博物館, 1975。  
 (85) 11韓国考古学会, 1984。  
 (86) 9 王巍, 1989。

#### 図出所目録

- 第1図 10河姆渡遺址考古隊, 1980。  
 第2図 82羅家角考古隊, 1981。  
 第3図 50浙江省文物管理委員会・浙江省博物館, 1978。  
 第4図 筆者写真  
 第5図 51中国科学院考古研究所, 1962。  
 第6図 筆者写真  
 第7図 筆者蔵拓本  
 第8図 筆者写真  
 第9図 筆者写真

#### 引用文献目録

1. 安徽省博物館, 1980, 「安徽貴池発現東周青銅器」(『文物』1980年第8期)。
2. 安徽省文物考古研究所, 1986, 「望江汪洋廟新石器時代遺址」(『考古学報』1986年第1期)。
3. 安徽省文物工作隊, 1982, 「潜山薛家岡新石器時代遺址」(『考古学報』1982年第3期)。
4. 安志敏, 1984, 「長江下游史前文化对海東の影響」(『考古』1984年第5期)。
5. 梅原末治・藤田亮策, 1947, 『朝鮮古文化綜鑑』第1卷(養徳社)。
6. 梅原末治・藤田亮策, 1949, 『朝鮮古文化綜鑑』第2卷(養徳社)。
7. 雲南省博物館, 1977, 「元謀大墩子新石器時代遺址」(『考古学報』1977年第1期)。
8. 雲南省博物館, 1981, 「雲南賓川白羊村遺址」(『考古学報』1981年第3期)。
9. 王巍, 1989, 「中国の穂摘用石庖丁の研究」(『中国考古学研究会第7回大会 研究発表資料』)。

10. 河姆渡遺址考古隊, 1980, 「浙江河姆渡遺址第二期發掘的主要收穫」(『文物』1980年第5期)。
11. 韓國考古学会, 1984, 『韓國考古学地図』。
12. 廣東省博物館・楊式挺, 1978, 「談談石峽發現的栽培稻遺迹」(『文物』1978年第7期)。
13. 廣東省博物館・曲江縣文化局曲石峽發掘小組, 1978, 「廣東曲江石峽墓葬發掘簡報」(『文物』1978年第7期)。
14. 吉林市博物館, 1987, 「吉林永吉楊屯大海猛遺址」(『考古学集刊』第5集, 中国社会科学院考古研究所)。
15. 吉林省博物館, 1957, 「吉林江北土城子古文化遺址及石棺墓」(『考古学報』1957年第1期)。
16. 吉林省博物館・吉林大学考古專業, 1985, 「吉林市騷達溝山頂大棺整理報告」(『考古』1985年第10期)。
17. 吉林省文物考古研究所, 1987, 『榆樹老河深』(北京)。
18. 嚴文明, 1982, 「中国稻作農耕的起源」(『農業考古』1982年第1期, 第4期)。
19. 嚴文明, 1988, 「中国稻作農耕の起源と展開」(『日本における稻作農耕の起源と展開』日本考古学協会)。
20. 黃承宗, 1982, 「從出土文物看安寧河流域的水稻種植」(『農業考古』1982年第2期)。
21. 廣西省壯族自治区文物工作隊・欽州縣文化館, 1982, 「廣西欽州独料新石器時代遺址」(『考古』1982年第1期)。
22. 江西省博物館・九江縣文化工作隊, 1982, 「廣西九江縣沙河街遺址發掘簡報」(『考古学集刊』第2集)。
23. 江西省文物管理委員會, 1962 a, 「廣西清江營盤里遺址發掘報告」(『考古』1962年第4期)。
24. 江西省文物管理委員會, 1962 b, 「江西修水山背地区考古調查与 試掘」(『考古』1962年第7期)。
25. 廣西壯族自治区文物工作隊・桂林市革命委員會文物管理委員會, 1976, 「廣西桂林甌皮岩洞穴遺址的試掘」(『考古』1976年第3期)。
26. 江蘇省文物管理委員會, 1958, 「徐州高皇廟遺址清理報告」(『考古学報』1958年第4期)。
27. 江蘇省文物工作隊, 1962, 「江蘇省連雲港市二澗村遺址第二次發掘」(『考古』1962年第3期)。
28. 黃陂縣文化館, 1985, 「黃陂縣作京城遺址調查簡報」(『江漢考古』1985年第4期)。
29. 黑龍江省博物館, 1975, 「東康原始社会遺址發掘報告」(『考古』1975年第3期)。
30. 後藤直, 1984, 「朝鮮半島における稻作の始まり」(『考古学ジャーナル2』No.228, 2月増大号, ニューサイエンス社)。
31. 湖北省宜昌地区博物館・四川大學歷史系, 1987, 「宜昌中堡島新石器時代遺址」(『考古学報』1987年第1期)。
32. 湖北省荊州地区博物館, 1984, 『江陵雨台山楚墓』(文物出版社, 北京)。
33. 湖北省博物館, 1982, 「楚紀南城的勘查与發掘(上)」(『考古学報』1982年第3期)。
34. 近藤英夫, 1984, 「インド稻作ノート…マハガラ遺跡の年代について」(『東海史学』第19号)。

35. 佐々木高明, 1976, 『続照葉樹林文化』(中公新書)。
36. 佐々木高明, 1982, 『照葉樹林文化の道』(日本放送出版協会)。
37. 佐原眞・佐藤敏也, 1984, 「インド最古の稲作文化」(『考古学ジャーナル2』No.228, 2月増大号, ニューサイエンス社)。
38. 山東省文物考古研究所・北京大学考古実習隊, 1984, 「山東棲霞楊家圈遺址発掘簡報」(『史前研究』1984年第3期)。
39. 四川省博物館, 1981, 「巫山大溪遺址第三次発掘」(『考古学報』1981年第4期)。
40. 上海市文物保管委員会, 1962, 「上海市青浦県崧沢遺址的試掘」(『考古学報』1962年第2期)。
41. 上海市文物保管委員会, 1973, 「上海市金山県戚家墩遺址発掘簡報」(『考古』1973年第1期)。
42. 上海市文物保管委員会, 1978, 「上海馬橋遺址第一・二次発掘」(『考古学報』1978年第1期)。
43. 上海市文物保管委員会, 1987, 『崧沢——新石器時代遺址発掘報告』(文物出版社)。
44. 蔣纘初, 1959, 「關於江蘇的原始文化遺址」(『考古学報』1959年第4期)。
45. 常州市博物館, 1984, 「江蘇武進寺墩遺址の新石器時代遺物」(『考古』1984年第2期)。
46. 浙江省博物館自然組, 1978, 「河姆渡遺址動植物遺存の鑑定」(『考古学報』1978年第1期)。
47. 浙江省文管会・浙江省博物館, 1976, 「河姆渡発現原始社会重要遺址」(『文物』1976年第8期)。
48. 浙江省文物管理委員会, 1960 a, 「吳県錢山漾遺址第一・二次発掘報告」(『考古学報』1960年第2期)。
49. 浙江省文物管理委員会, 1960 b, 「杭州水田畷遺址発掘報告」(『考古学報』1960年第2期)。
50. 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館, 1978, 「河姆渡遺址第一期発掘報告」(『考古学報』1978年第1期)。
51. 中国科学院考古研究所, 1962, 『新中国の考古収獲』(『考古学専刊』甲種第6号)。
52. 中国科学院考古研究所, 1965, 『京山県屈家嶺』(『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種第17号)。
53. 中国社会科学院考古研究所湖北工作隊, 1983, 「湖北枝江関廟山遺址第二次発掘」(『考古』1983年第1期)。
54. 中国社会科学院考古研究所四川工作隊, 1988, 「四川樂山市考古調査簡報」(『考古』1988年第1期)。
55. 中国歴史博物館考古調査組・河南省博物館登封工作站・河南省登封県文物保管所, 1977, 「河南登封陽城遺址の調査与鑄鉄遺址的試掘」(『文物』1977年第12期)。
56. 長辨文物考古隊直屬工作隊, 1961, 「1958至1961年湖北鄖県和均県発掘簡報」(『考古』1961年第10期)。
57. 鎮江博物館, 1983, 「鎮江市馬迹山遺址的発掘」(『文物』1983年第11期)。
58. 陳公哲, 1957, 「香港考古発掘」(『考古学報』1957年第4期)。
59. 陳文華・張忠寛, 「中国古代農業考古資料索引(三)」(『農業考古』1982年第2期)。

60. 鄭紹宗, 1956, 「熱河興隆發現的戰國生產工具鑄範」(『考古通訊』1956年第1期)。
61. 丁穎, 1959, 「江漢平原新石器時代紅燒土中的稻穀殼考查」(『考古學報』1959年第4期)。
62. 東亞考古学会, 1933, 『南山裡』(『東方考古學叢刊』甲種第3冊)。
63. 東北博物館, 1957, 「遼陽三道壕西漢村落遺址」(『考古學報』1957年第1期)。
64. 東北文物工作隊, 1955, 「遼陽市三道壕清理了一處西漢村落遺址」(『文物參考資料』1955年第12期)。
65. 南京博物院, 1958, 「南京市北陰陽營第一・二次的發掘」(『考古學報』1958年第1期)。
66. 南京博物院, 1962, 「江蘇贛榆新石器時代至漢代遺址和墓葬」(『考古』1962年第3期)。
67. 南京博物院, 1964, 「江蘇邳縣四戶鎮大墩子遺址探掘報告」(『考古學報』1964年第2期)。
68. 南京博物院, 1965, 「江蘇邳縣劉林新石器時代遺址第二次發掘」(『考古學報』1965年第2期)。
69. 南京博物院, 1974, 「江蘇六合程橋二號東周墓」(『考古』1974年第2期)。
70. 南京博物院, 1980, 「江蘇吳縣草鞋山遺址」(『文物資料叢刊』第3期)。
71. 南京博物院・南京市文物保管委員會・江蘇省文物管理委員會・江蘇省博物館, 1963, 『江蘇省出土文物選集』(北京)。
72. 新田榮治, 1987, 「ベトナム初期稲作農耕の發展」(『東アジアの考古と歴史』)。
73. 量博滿, 1985, 「中国新石器時代の稲作」(『東南アジア考古学会會報』第5号)。
74. 莫稚, 1957, 「廣東寶安新石器時代遺址調查簡報」(『考古通訊』1957年第7期)。
75. 福建省博物館, 1976, 「閩侯縣曇石山遺址第6次發掘報告」(『考古學報』1976年第1期)。
76. 福建省博物館, 1984, 「閩侯溪頭遺址第2次發掘報告」(『考古學報』1984年第4期)。
77. 福建省文物管理委員會, 1965, 「福建福清東張新石器時代遺址發掘報告」(『考古』1965年第2期)。
78. 望江縣文物管理所, 1988, 「安徽望江縣新石器時代遺址調查」(『考古』1988年第6期)。
79. 香港中文大學中國考古藝術研究中心, 1986, 「介紹台灣新發現的芝山岩文化」(『文物』1986年第2期)。
80. 游修齡, 「對河姆渡遺址第四文化層出土稻穀和骨相的幾點看法」(『文物』1976年第8期)。
81. 橫倉雅幸, 1989, 「東南中國の青銅收穫具について」(『國學院大學考古學資料館紀要』第5輯)。
82. 羅家角考古隊, 1981, 「桐鄉縣羅家角遺址發掘報告」(『浙江省文物考古所學刊』)。
83. 李洪甫, 1985, 「連雲港地區農業考古概述」(『農業考古』1985年第2期)。
84. 禮州遺址聯合考古發掘隊, 1980, 「四川西昌禮州新石器時代遺址」(『考古學報』1980年第4期)。
85. 渡部忠世, 1977, 『稻の道』(日本放送出版協會)。
86. G. R. Sharma and D. Mandal, "Excavation at Mahagara 1977-78", Department of Ancient History, Culture and Archaeology, University of Allahabad, India, 1980.